

昭和六十年八月三十三日郷土研究会資料

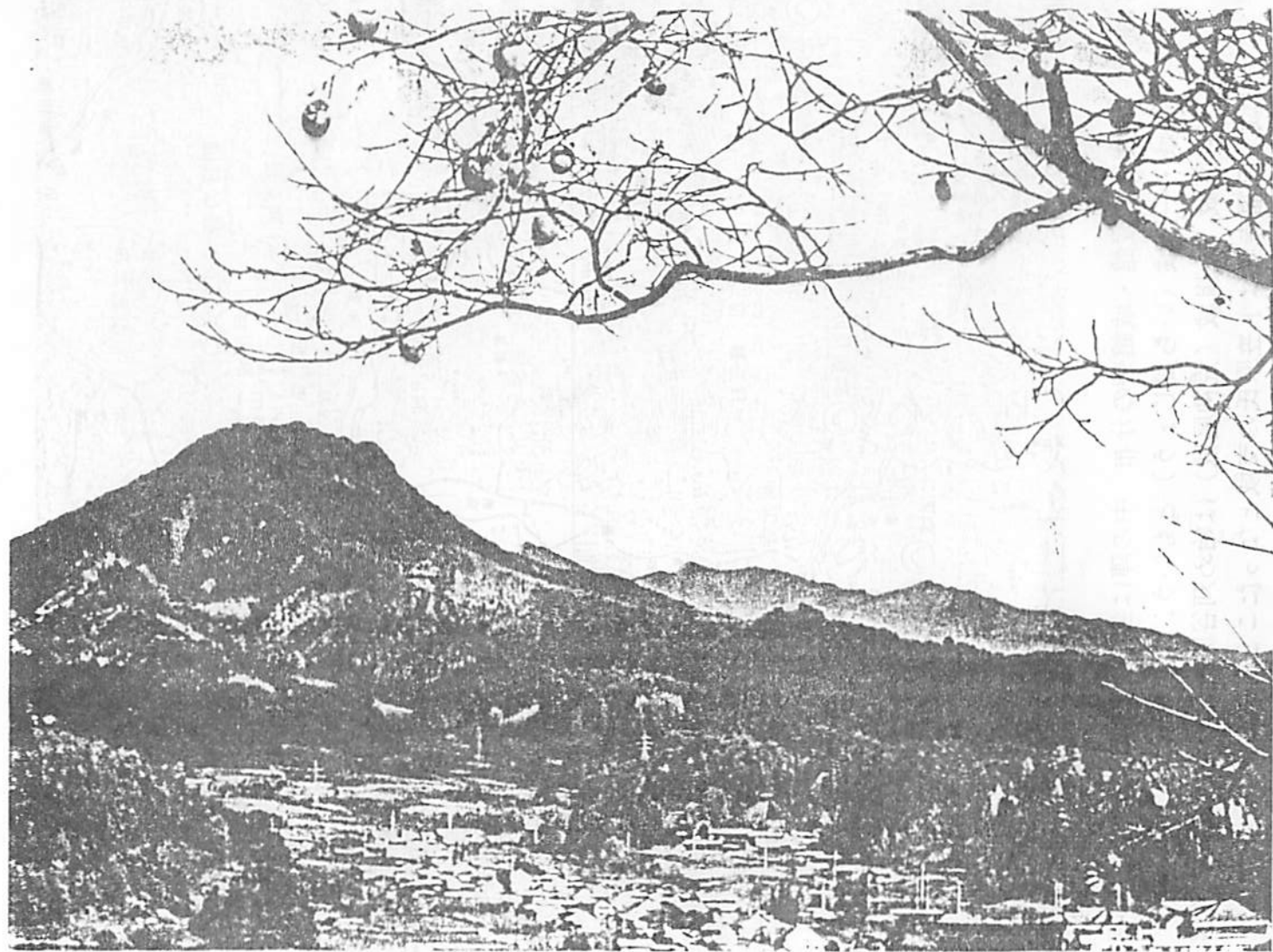
創立二十周年記念

第八十二回研究発表

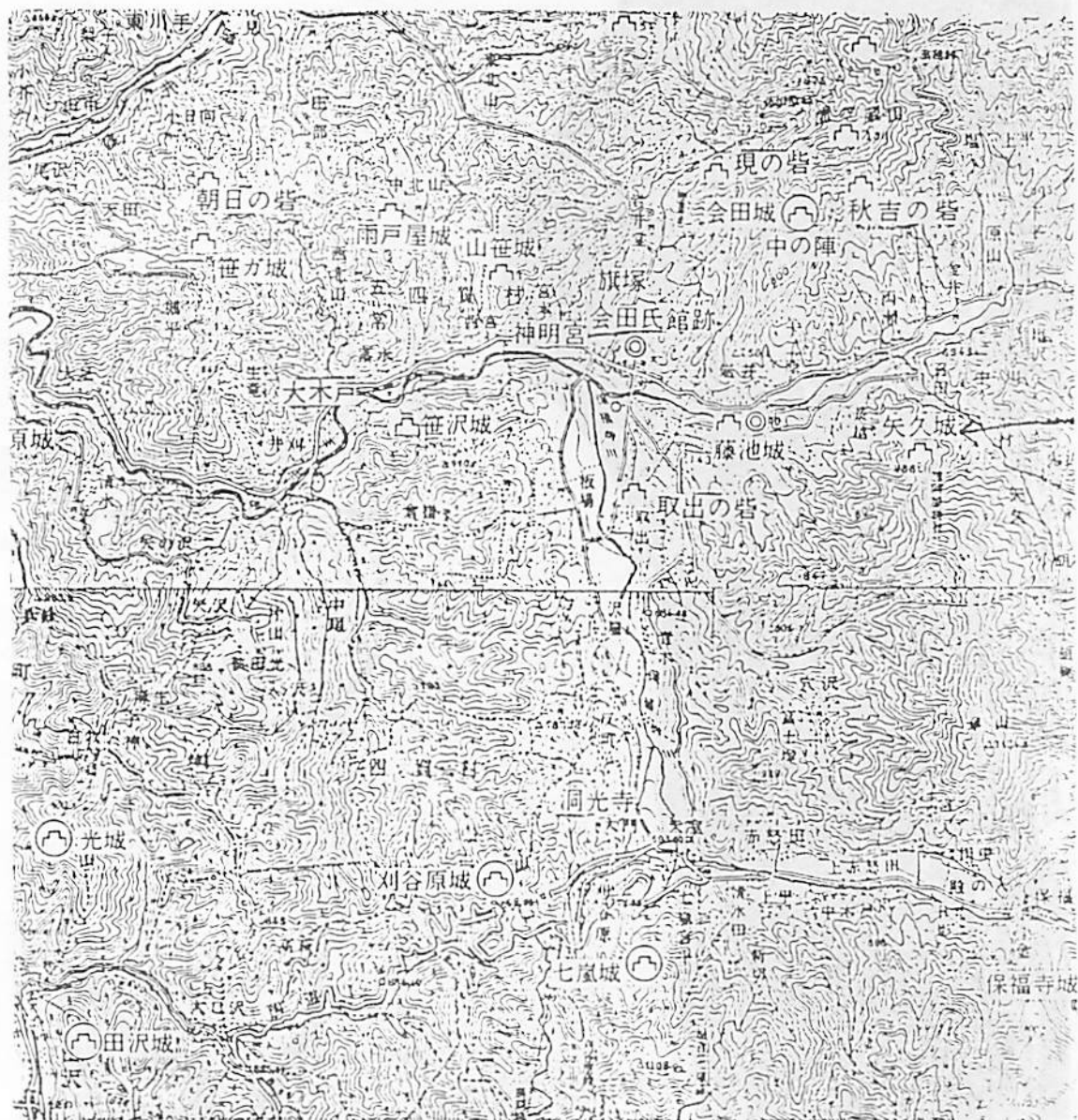
越谷会田氏のルーツを探る

主催 越谷市郷土研究会

発表者 山崎善司



秋の富士山

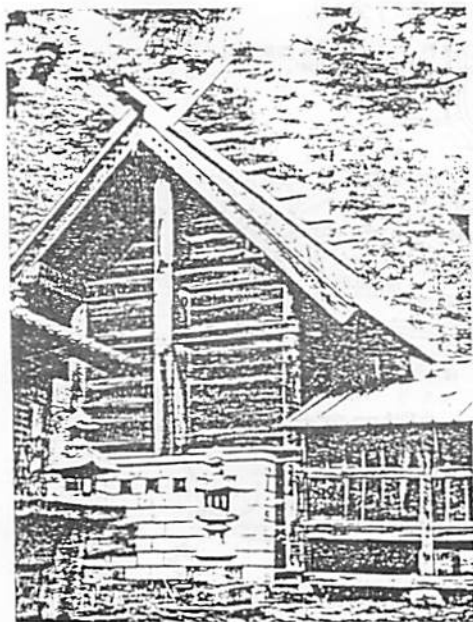


第133図 四賀村の城館・城館砦の分布 中の陣は会田氏要害城 矢久城は召田城・一期城（いちごじょう）ともいう。
 刈谷原城，七嵐城（荒神尾城）は始め刈谷原氏，のち太田氏の要害城，保福寺城は小笠原氏の支城となったこともある。



第三三八図 小笠原長時願文 京都建仁寺禅居庵藏 (天文21年)

この年長時は子貞・弟信定を伴って京都に亡命中、晴信は頼井城を改修したり、小岩嶽城を落したりして、もっぱら松本地方の経営にあたった



伊野島神社本殿



第137図 洞光寺墓地の太田弥助兄弟(中沢氏)の五輪石塔。(建碑は江戸時代となつてからのもの)

▼ 生坂・坂北・坂井・麻績村全図



▼ 豊科・明科町・四賀・本城村全図



越ヶ谷会田氏のルーツを探る

初めに

越谷市内特に越谷町とその周辺を見ますと、「会田」姓を名乗る人達が実に多い事に気が付きます。(電話帳によると約二百四十軒)

越谷の歴史を見ますと、「越ヶ谷宿」といはれた近世の宿駅の中や、その周辺の開発の記述には必ず「会田」姓の者が見えます。ではこの会田を名乗る人達は、何時・何故越ヶ谷の地に移り居住したか、といふ事が知り度くなります。

この会田氏のルーツに関しましては、「越ヶ谷瓜の蔓」
「新編武蔵風土記稿」
「越ヶ谷旧記」
「会田出羽家系図」等に断片的に記載されているが、今一つ、相互の記述に異物感があり、一本化し得ない違いが発見されて、釈然としない物を感じます。

昭和四十九年夏、筆者は、この疑問を解決すべく「越ヶ谷会田氏」のルーツである「信州会田より来る」「信州会田より六家同道にて罷り越候」「信州より落居の節」等と記載されている信州会田村へ調査旅行を致し、多大の収穫を得て帰り、その翌年一月「会田氏の研究」という小誌を自費出版致しました。しかしながら素人が、小型タイプを打ち、ガリ印刷の発刊でしたので、体裁も悪く誤字だらけで、おまけに印刷ムラで、読めた代物では無い始末でした。何時の日か、誰にでも解り易い、そ

して格調の高い「越ヶ谷会田氏の研究」と題して、再度発刊致し度いと願つてをりましたる処、この度、越谷市郷土研究会、創立二十周年記念事業として取上げて頂きましたので、思い切つて永年の夢を実現すべく筆を取つた次第です。

「越ヶ谷会田出羽家」に対する疑問点に関して種々解決の付かぬ所が処々御在いますが、それはそれとして、一応その出自とルーツを説明すべく記した次第です。

信州会田村を先祖の地として四百余年後の今日まで、代々語り継がれて来、そして今も尚その言い伝えの通りに墓参に詣でている「越谷新町会田久衛門家」当主会田圭氏に対し、敬意を表すると共に、この項を記するに当り、長野県東筑摩郡四賀村字会田町にて郷土史の研究者花村実先生よりの資料提供と種々御教導に、深く感謝致します。尚、東筑摩郡誌の編集の担当を致しました、原嘉藤先生にも一方ならぬ御教導を頂きましたが、誠に残念な事を致しました。心より御冥福をお祈り致します。

この項を記するに当り、起因となつたのは「新町会田久右衛門家」に、伝わる伝承であります。資料も勿論重要であります。我々は日常の生活に追われて、祖先からの伝承等は忘れられて居りますが、個々の家庭で、代が変つた時、その家に伝はる伝承を、次の代の若者に伝えて置かなければ、伝承は失なわれてしまいます。我々は精神的資産である歴史的な文化遺産と伝承を、後代に伝えて行かなければならぬ義務があると通感する次第であります。

昭和六十年八月二十五日

山崎善司

越谷より見た会田氏のルーツ

越谷市に住む「会田姓」の者は、電話帳で見る限り二百四十軒程有ります。

これ等「会田氏」の先祖は何時・何処より越谷の地に來住し、この様に多数の会田姓の家々が繁栄分派したのであるうか。

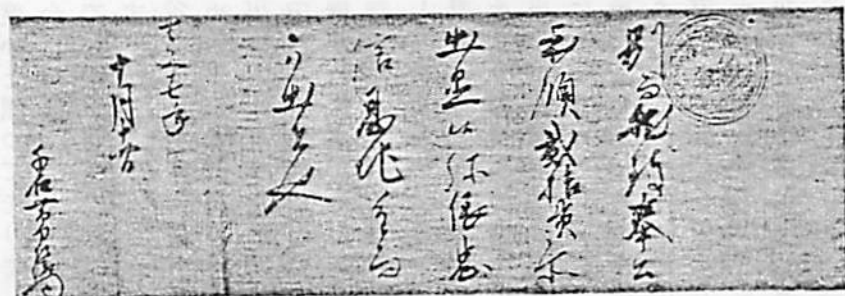
越谷市の歴史の中で、中世より現代に至るまでの間には多種多様な変革があつたが、その中で取り分けての大変革は、それまで古河公方と上杉氏との争乱で上杉氏の支配に属していた所へ、小田原を本拠として急速に進出して來た北条氏が、相模國・武藏國を支配下に置きその勢力は関東全土に及ぼうとしていた時、豊臣秀吉の為に滅亡、そして徳川家康の入國と、目まぐるしく變りやがて天下太平の世の中となる。

領主層の交替、然も戦による勝敗においては、敗者側の家臣に取つては死を意味する。生き残つた人々に取つても、それ以前の時代の歴史・文化・思想・秩序が破壊され抹殺され、生活の基盤を根底からひっくり返つてしまふ。前時代の記録書には、総て「御入國以前の事は、相分ら不候」として消されてしまふ。

したがつて、徳川家康御入國の天正十八年八月以前の事に付いては、寺社は勿論の事各戸の家系図すら記載されていぬ。これ等の中で、相模町の中村家・越ヶ谷会田出羽家・麦塚の中村家等の記録は注目されるものである。

越ヶ谷に居住した「会田氏」に関する、入居当時の資料と致しましては「越ヶ谷瓜の蔓」「越ヶ谷旧記」「会田出羽家」(現静岡市居住会田家直系当主安之助氏蔵)等に、部分的に記録がありますが、今一つ不明の点がある。

り、この解明の必要を感じる次第で有ります。



第三三九図 武田晴信安堵状 松本市中山仙石三津江蔵 (天文17年)

この年七月晴信は塩尻陣で長時を破り、着々林大城の攻略をたくらみ、壇原城付近の土豪を懐柔しこのような安堵状を出している。

越ヶ谷会田氏の出自

越谷市における「会田氏」に付いては、徳川家康御入国以後の事は、文書や系図書等に数多く見られ、語り尽くされて来たが、それ以前の記述に付いては、一本化し得ない処が有り、釈然とし得ないものがあります。

その主なものを列挙すると

◎越ヶ谷瓜の蔓

「中町会田五郎兵衛儀ハ、先祖会田出羽儀ハ、天正以前、海野小太郎、信州会田より郎等六家同道に、而罷越候、大家に而御殿高場に陣屋住居致」

「中町大屋敷会田五郎兵衛儀、(中略) 元來会田出羽事ハ海野小太郎之子孫ニ而信州会田よ天正年中越谷村へ藝居、越谷領一円に所持致居候処」

「会田出羽落居の節」「落居の頃」

◎越ヶ谷旧記

「清和源姓」

後改

会田氏

本氏

家紋

滋野姓

海野

幕紋

三本ツ竹引
六文ツ銭
左二ツ巴

会田氏元海野小太郎広道之末流にて代々信州小県郡海野村住居、子孫属小笠原家数代有戦功至小笠原信濃長時終為武田信玄失利避旧領信州上京従士悉流浪、於是会田将監幸久嫡男会田出羽資清半人也、後至弘治始属北条氏康氏政父子領武州地
元祖母父之名不相知 会田出羽総領

会田出羽資久歳不相知」

(上略) [会田家系図]

幸久 会田小七郎 改将監

天文年中小笠原信濃守長時在信州林館之節常武田小笠原雖為一門互争歳年尚矣、自享祿至天文武田信虎同晴信与小笠原長時数度及合戦、長時終為信玄失利干、時避旧領信州而上京、従是徒士悉流浪云云、至弘治初属北条氏康氏政父子、而領武州之地焉

資清 会田出羽 生国信濃

父将監相伴自信州到武州越ヶ谷、而居住此所、往年因太田美濃守資政後号三楽斎、常々三楽与会田氏加懇意而親故授資之字、依自是子孫用資之字云云、天正十七己丑八月六日卒号喜教院殿長与利歛居士

これ等の記述により、会田出羽資清の先祖は、海野小太郎広道の子孫で、会田村に住したにより、会田氏を称したという会田氏の子孫である。

会田出羽資清は、信州会田より、郎等六家同道にて罷越して、越ヶ谷御殿高場に陣屋を構え、越ヶ谷一円を所持していた大家であつたが、又反面では「罷越」と記しながら「落居の節」とも記されているので、信州会田より何等かの理由にて逃れて来た事がわかる。

「会田出羽家系図」「越ヶ谷旧記」には、父将監幸久の嫡男で、岩槻城主太田三楽斎資政と懇意を加えるに因り親しく「資」の字を授かり、越ヶ谷一円を受領した、故に子孫代々「資」の字を用いている。

会田出羽資清が信州会田を逃れて、武州越ヶ谷の地に移り住んだ理由に付いては、小笠原家に代々仕え戦功が有つたが、小笠原信濃守長時の時、武田信玄に敗れて京へ

逃れた為に從士悉く流半したと記されている。

武州越谷の地に落居した時期に付いては、岩槻城々主として太田資正が居城していた期間という事になる。即ち天文十六年十月十九日、岩槻城主太田資時（北条方）死去にともない資正（上杉方）城主となる。この事は大変不自然であるが、その直後に北条氏康は岩槻城を包囲し、翌正月三日資正と和儀し、資正長子氏資六歳と氏康の娘三歳との婚約を条件に冊を解いている。

この時期より十六年後の永祿七年七月、長子氏資の為に、資正・政景父子が岩槻城を追放となるまでである。

この期間でなければ、会田出羽に「資」の字も、「越ヶ谷一円の所領」も与えられない事となる。

天文十六年（一五四七）十月十九日 資時が没すると直ちに、太田氏代々の城として資正が城主となつた。

太田資時は何故に北条方かという点、江戸太田資高は上杉の將であつたが、北条に内応した為には、江戸城は北条の持城と變つた。以来北条方となるが、この資高の弟に資時・資貞がいる。

先に、岩槻城は太田資頼の時家臣の渋江三郎が北条方に内応した為落城。資頼は石戸城に逃れ、後、北条方の手薄に乗じて奪還、岩槻城は資頼（上杉方）の城となるも、再び北条方に包囲、攻められていく。その後間もなく資頼は、岩槻加倉の寺に隠居して、城主は資時に譲つていく。天文十五年の川越の大夜戦の時、川越城主備軍三千八百騎を、上杉・古河連合軍が十万の大軍で包囲した。この籠城の兵を救はんと、北条氏康は手兵八千騎で夜襲をかけて、大勝利を得た。この戦の間岩槻城の太田資時は、静観して城より兵を動かしてないので北条方という事がわかる。

次に、永祿七年（一五六四）正月四日、市川国府台城に里見・岩槻太田の連合軍籠るの報に、北条氏康急に兵を催して、これを落す。この戦で、太田資正三千八百騎を率いて出陣したが、岩槻城に逃げ帰つた兵わづかに八百と記されている。

この為岩槻城中には兵力失せて無力となる時、「約束の北条氏康の娘との婚儀を取行い、北条方付人多数が岩槻城を固める事となる。

資正は、次子政景と小数の家臣と共に、宇都宮氏に前後策を謀る為出張して帰る時、長子氏資の手兵の為に、帰城を阻まれ、遂に岩槻城より追放となつた。

その後、岩槻城奪還を願ひ、種々策を企てるが、遂に再び回復出来なかつた。

会田出羽資清は、上杉方の太田資正に仕えていたが、永祿七年（一五六四）岩槻城より資正追放されると、城中は、北条氏康の娘と婚儀をした氏資と、北条方の付人で守られる事となる。岩槻城には、三楽齋資正以来の家来も多数残つていたであろうから、これ等の資正方家臣の立場は微妙であつた事であろう。

城主氏資は、氏資側近の家臣と父祖以来の残兵を統合して、北条方として戦つていたが、三年後、永祿十年に北条氏政は安房里見を攻めるべく、上総周集郡三船山（現君津町）に城砦を築き、陸海の交通を遮断した。里見軍は、下総の千葉氏との交通路の為、これを攻める。この戦の時、三船城の危急に、応援として駆け付けた氏資一族五十三騎と共に三船城々外にて全員討死してしまつた。時に氏資二十五歳であつた。

この事件により、岩槻城は名実共に北条氏政の城となり、以後は城主のいない岩槻衆として、各地に転戦を強いられる事となる。

会田出羽資清は、太田三楽齋資正に取立てられて「越ヶ谷一円を所持」し親しく「資」の字を授けられた間柄ではあつたが、普代の家臣では無かつたので、資正の落着く先である常陸の片野城までは、行かなかつたのである。

越ヶ谷瓜の蔓には、「天正年中越ヶ谷村へ執居」とあるのは、氏資討死して、主な岩槻衆となつた太田氏の残された家臣団の内、資正に心を寄せる者は、この時期に排除されたであろう事が推測出来るのである。この様に変転極まりない時代に、生き抜く事は大変であつた事であらう。この辺の事が、たつた一行「天正年中越ヶ谷村へ執居」と記されている事で、その間の事情を現しているものと思われる。

かくて、新たに小田原北条方の家臣団が、越ヶ谷周辺に入部して来る。八潮市南後谷の会田家・越ヶ谷市宮本（四丁野）会田太郎兵衛家（現川口元郷住）・八潮市馬場の浜野弥平治家・越ヶ谷市麦塚の中村右馬之助家・越ヶ谷市内柿ノ木内山弥衛門等皆この時代の入居を伝えている。

天正時代は小田原北条の時代で、周辺各地に所領を宛行なわれた家臣達の開発により、村々が再興され新体制に組込まれて行つた。関宿城修復工事の工夫割当状・下野大平山城攻めの先陣岩槻衆等この間の事情を物語つて

いる。
やがて天下統一を目差す豊臣秀吉の為に小田原北条は滅亡するが、その前年天正十七年（一五八九）八月六日会田出羽資清は没し、越ヶ谷天嶽寺に葬る。

天正十八年八月一日、徳川家康が江戸城に入府するや関東の情勢は一変し、徳川の時代となる。今まで小田原が中心で総てが動いていたものが、止まり江戸が中心となつた為に、北条の家臣として名を連ねた人々は百姓身

分となり、終戦と共に帰農させられたのである。

会田出羽資久は資清の後を継ぐ、間もなく徳川の時代になると、小田原北条の時代に、「蛭居」させられ隠棲していた会田出羽家はその一族同道六家と共に、日の当る舞台に出て来る。

元祖母父之名不相知

会田出羽資清惣領

会田出羽資久

歳不相知

天正十八庚寅年相州小田原北条、為太閤秀吉滅亡同八月

東照宮関東御入国之度、越ヶ谷辺被為成之刻、資久初て奉拝謁其後新方領増林村之内御茶屋御殿有之所、越ヶ谷領御鷹野御成之節出羽屋敷林等被遊上覽場所宜敷候ニ付、地面可指上旨被仰付則奉指上、御殿并御賄屋鋪共出羽所持之地面之内被遊御建度、入御之節出羽并妻御目見被 仰付奉蒙 御懇意之上意、其上御馬驗鐘馗之御小篋・御紋付御団扇・東照宮御筆鶴之御絵於御前被下置候

台徳院様度、被為成、出羽夫婦御目見被 仰付奉蒙上意、然ル処宇都宮御座之節忍道御案内出羽被仰付御供仕、其節森川七太夫、久世三四郎、会田出羽一所御用相勤、彼是為御褒美畑疇町歩被下置、伊奈備前守書判印形之一通被相添被下之、右拝領之品、并

書面出、羽次男会田又六資忠家代、所持仕候、右会

田出羽武藏国越谷領天嶽寺江葬申候

右書面写

急度申入候、仍其方御公方御用能、被走廻候ニ

付て、為屋鋪分ト畑壱町步被下候、長ク所務可

被致候、弥御用可被走廻候、右之通本多佐渡御

存知候間如斯候仍如件

慶長十三年

伊奈備前印形

申五月十八日

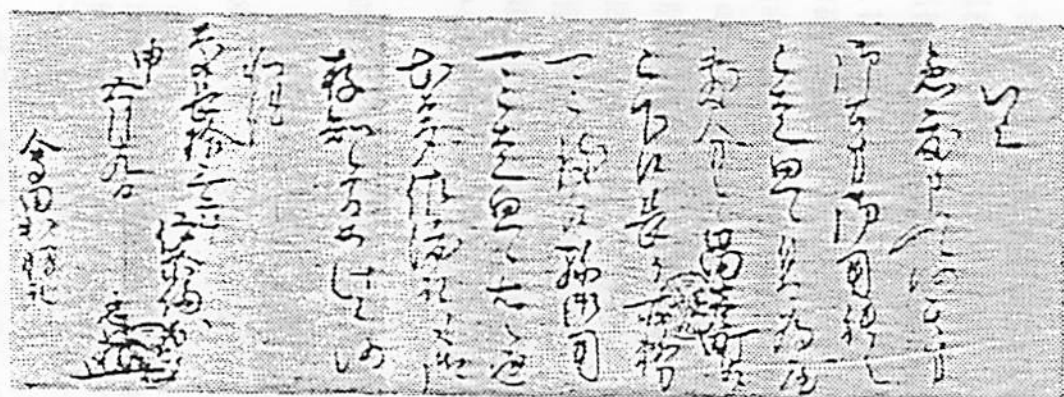
書判

会田出羽殿

以上の会田出羽家系図書上の通り、徳川家康度々越ヶ谷に放鷹ある時、御目通り有り取立てられ、会田出羽屋敷の内に御殿を造営して差出し、御殿の御留守役を仰付られている。

二代將軍台徳院様の代に、宇都宮御座の節、忍道御案内を会田出羽に仰付られ御供仕り、会田出羽一所御用相勤めた事により、千石にて御使番に召抱える申出を御辞退申上げて、弟伊右衛門を大御番に差出す等功績があつた。

二代会田出羽資久の代、徳川の時代と共に脚光を浴びて、再び越ヶ谷の支配的勢力を持ち、郎等六家同道之者越ヶ谷草創の大家として、以来管営として会田一族の扶養に努め、今日の如く「目出た」の若松様よ、枝も栄えて木も繁る」の唄の如く、会田姓を称する者二百数十軒にもなり栄えて来たのである。



伊奈備前差添書状(越ヶ谷小島家蔵)

会田出羽家系図 (静岡市住会田安之助氏蔵)

祖先ハ人皇五十六代 号菊宮
 清和天皇 貞保親王 基淵王 滋氏王 中納言從三位 信州守護 武藏守從五位上

弥平大夫

海野小次郎

海野小太夫權守

海野小太郎

海野弥平四郎

海野小太郎

海野右衛門尉

重道

広道

幸道

幸親

幸広

幸氏

長氏

海野邑ニ住スニ
 ヨリ号海野

居住于海野邑

保元之乱属左馬頭
 義朝、度々軍功

寿永二年十月属左
 馬頭義仲、備中水
 島合戦ノ時大將、
 終ニ討死ス

属志水冠者義高、
 木曾殿嫡男也、而
 在于相州鎌倉、頼
 朝從而本領海野庄
 賜フ無双之弓達人

領信州海野庄

祢津小次郎

道直

住于信濃国祢津郷子
 孫代々号祢津神平

望月三郎

広重

住于信州望月村子孫代々称
 望月也家紋ハ日輪七曜九曜

信濃守從五位下
 海野小太郎

茂氏

幸持会田次郎
 住于信濃国会田郷
 故幸持号会田也

幸盛塔原三郎

資氏田沢四郎

氏則借屋原五郎

光之満田六郎

幸春 真田七郎

女子 赤木兵部丞妻

真田小太郎

真田左近大夫

海野小太郎彈正忠

頼幸

則幸

善幸

於笛吹峠合戦之時
 參宗良親王御味方
 故被任彈正忠

会田小次郎

幸栄

右衛門尉在鎌倉

建長四年三月十九日
宗尊親王將軍宣下時
被右衛門尉

会田小次郎

長栄

信濃守

文永正心之間為在番度
々上京云云永仁五年五
月十八日吉見殿叛鎌倉
公方之則到干彼館誅之也

会田左衛門次郎

義重

飛騨守 在鎌倉

延慶三年十一月六日午刻自決
出火鎌倉中大略類燒干時義重
宅及舞馬交矣

会田兵衛太郎

盛重

左近允

正和元徳之間為在番勤干六
波羅元弘三年五月七日於六
波羅防戰之時討死ス

会田松龜丸

長昌

左衛門尉

父盛重戰死之刻少年而避鎌倉
往到干信州属小笠原三位真宗
卿同政長父子而當國之取合度
有有功

会田新次郎

重清

出羽介

明徳二年於内野合戰
之時属小笠原信濃守
長基而有軍功ト

会田五郎右衛門尉

宗清

兵衛大夫

明徳三年八月二十八日
相国禪寺供養之時会田
宗清属小笠原信濃守長
秀供奉

会田將監

清信

嘉吉九年三月十七日小笠原
時長与同左京大夫宗康及其
臣等相別而互進兵士於善光
寺表漆田原一日七度合戰時
長六度失利到七度時時長怒
引卒軍士溝口上野坂西会田
等無一之勤依会田始悉戰死

会田太郎右衛門

信守

治左衛門尉

属小笠原大總大夫清宗
而在干信州

会田小次郎

幸清

治左衛門尉

文明十年十一月清宗卒
之後其子長朝為一族平
人於信州牧ノ島此時幸
清亦為浪人ス

会田中務丞

時信

属小笠原貞朝而在信
州林之辺永正十二年
六月剃髮号寛休

会田小七郎

幸豊

治部左衛門尉

小笠原信濃守長棟在干林辺
大永享祿之間長棟卒兵士攻
落松尾城之時幸豊勤干彼地
有功ト

会田小七郎

幸久

改將監

天文年中小笠原信濃守長時
在干信州林館之節中路長時
数度及合戰終為信玄失利干
時避旧領信州而上京從是從
士悉流浪云云至弘治初属北
条氏康氏政父子而領武州之
地ト

会田出羽

資清

生國信濃

父將監相伴自信州到武州越天正十八年相州小田原
々谷而居住干此所、往年因北条家為太閤秀吉公滅
太田美濃守資政後号三楽常亡同八月
々三楽与会田氏加懇意而親 東照宮関東御入國之時
故資之字依自是字孫用資
資久初奉拜謁下略

会田出羽

資久 以下略

会田中務丞

信清

属北条殿而領於武州総州之
内也、以下略

松寿丸 松千代

某 某

山城守

天正

以上が会田村字会田の郷土史研究家、花村実氏提供の資料であります。越谷市より見たる会田氏のルーツには出て来ない大きな誤差が有ります。

それは、越谷よりの資料では、会田氏の先祖は、海野小太郎より分派した次郎幸持が会田に住したにより、会田氏を称した。その子孫であるという事で、信州会田より武州越谷に陣屋を構えた事になる。

長野県会田村の資料によると、会田次郎幸持の子孫は、応永六年（一三九九）の大塔合戦の時には、すでに会田郷には居住していない事になつてゐる。会田郷には同族海野二十三代小太郎幸義の舎弟岩下豊後守が、会田虚空藏山城の城主となつてゐる。

「東筑摩郡誌」「小県郡史」「四賀村村誌」等にも、その理由は明確ではないが、支配者の交替がなされた事は明白であり、広田寺記録にも岩下豊後守を開基としてゐる。

岩下氏も会田に住すと、会田氏を称し代々小次郎を名乗つてゐる。大塔合戦の時には反小笠原の国人側で、海野幸義の陣で戦つてゐるが、三十年後小笠原宗康が守護となつてから、信濃の国人等は皆従つてゐる。

一方越谷会田出羽家系図中には、会田長昌は小笠原真宗に、重清は小笠原長基に、宗清は小笠原長秀に、清信は小笠原時長に従い戦死、信守は小笠原清宗に仕え、幸清は、長朝に従い長朝と共に浪人等と代々始期より一貫して小笠原家に仕え、行を共にしてゐる。

越谷における会田氏の伝承と、「会田出羽家系図」とに異物感があり疑問点が解明されないのも、この辺の事情にも関連して来るのである。

会田氏を系図的に見ると

天道山縁起 (四賀村召田、天道山神社)

滋野系図

神皇産霊神

五世ノ孫
中川村天道山ノ祭神
天道根命
神武天皇ノ朝紀国造

東人
大和国葛野郡檜原造ト称
天平勝宝元年(一四一〇)
駿河守トナル姓伊ソ志臣
ヲ賜ル

尾張守
家譚
延暦年中(一四四二)六五
滋野宿祢姓ヲ賜ハル滋野
氏ノ祖

貞王
貞雄
弘仁年中滋野姓ヲ賜ル

從五位下滋野朝臣
恒蔭
貞観十年(一五二八)
信濃介トナル

正六位下
恒成
正六位上
幸俊
允馬権助
天曆四年(一六一〇)
信濃国望月ノ牧監ト
シテ下向ス

因幡介トナル

信濃介
 幸経
 天延元年(一六三三) 海野
 莊ノ下司トナル
 幸明
 海野小太郎信濃守海野ノ祖
 幸真
 海野小太郎信濃守
 幸盛
 小太郎信濃守
 幸家
 小太郎信濃守

小泉郡川西部ニ居住ス
 根祿小次郎根祿ノ祖
 直家
 小泉郡川東部ニ居住ス

望月三郎望月氏ノ祖
 重俊
 北佐久郡西部望月ニ住ス

小太郎信濃守
 幸勝
 小太郎左衛門尉

幸親
 保元乱(一八一六)ニ
 義明ニ属シ東国ヨリ京
 都ニ上ル
 幸広
 木曾義仲ノ一将トシテ横田
 川原ノ陣ニ参加ス寿永二年
 (一八四三)越中俱利加羅
 峠ノ戦ニ参加ス

識人
 覚明
 吳福寺 学僧トナリ親ラン
 ヲ補ケテ真宗ヲ広ゲシム帰
 国シテ更科郡ニ康楽寺ヲ創
 ム

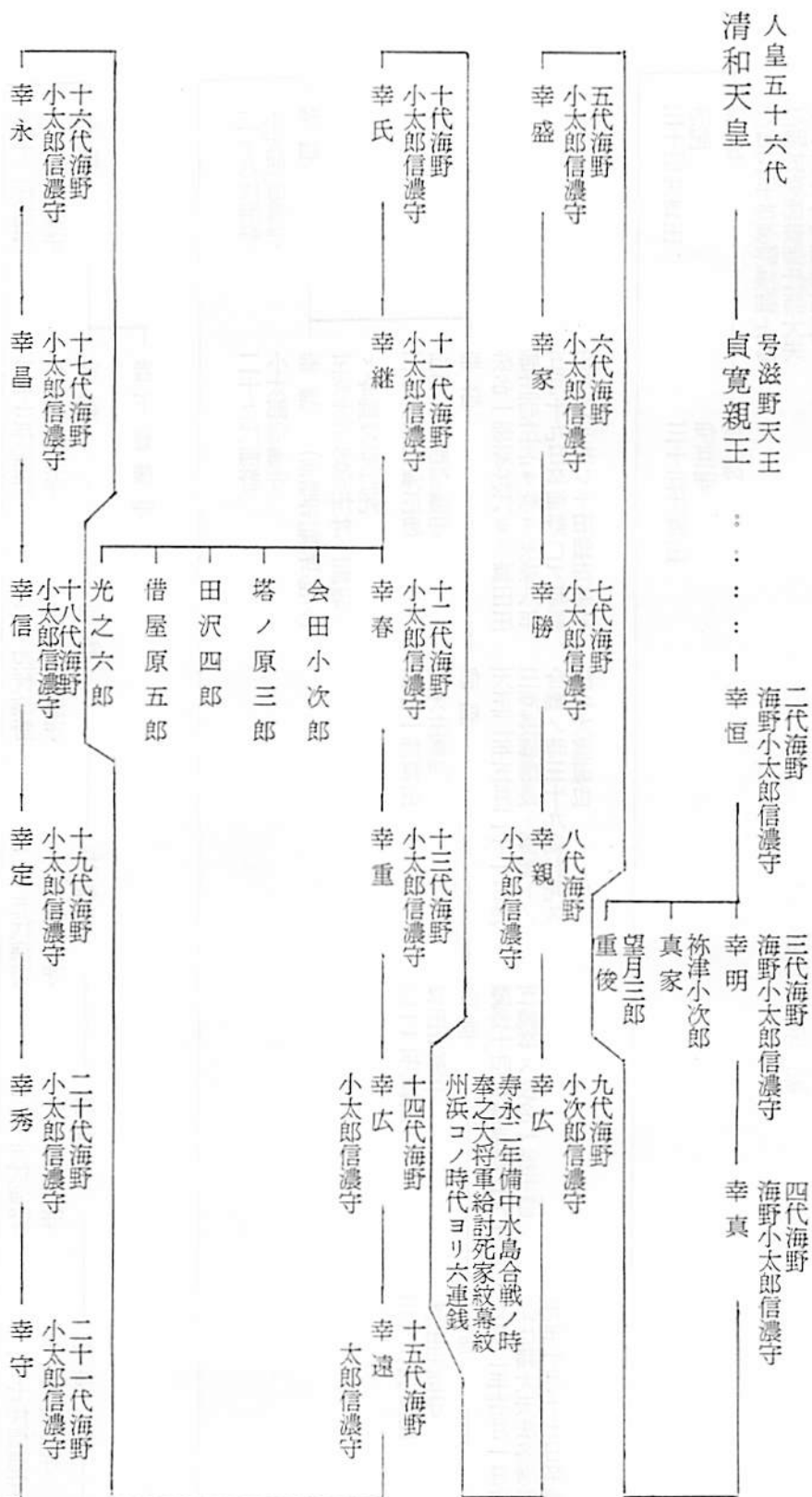
左衛門尉信濃守
 幸春 七郎 (海野小太郎)

幸氏
 建久四年(一八五三)三月
 頼朝ニ從ヒ信濃三原ノ符ニ加
 建久一年三月富士藍沢ノ夏符
 ニ参加嘉禎三年(一八九七)
 八月鶴岡ニテ流鏑馬会ニ奉時
 時頼之視ル武田信隆望月重隆
 等ト並ビ弓馬ノ四天王ト云ハ

幸継
 次郎(会田次郎)
 幸持 東筑摩郡会田虚空藏山ニ城ヲ築ク
 三郎(塔ノ原二郎)
 幸次 東筑摩郡中川手村塔ノ原ニ城ヲ築ク
 四郎(田沢四郎)
 幸国 東筑摩郡上川手村田沢山ニ城ヲ築ク
 五郎(刈屋原五郎)
 氏則 錦部村刈屋原鷹住根山ニ城ヲ築ク
 六郎(光ノ六郎)
 光元 上川手村光仁場山城ヲ築ク

長野県東筑摩郡召田(メスダ)に有る、天道山神社縁起書に有る、滋野氏系図は以上の如くであるが、氏姓辞典シゲノ(二七三九頁)とやゝ一致する。縁起書には、神祖を神皇産靈神(上古十一世カミムスビ朝二十代)とし、氏姓辞典では、神魂命(カミムスビノミコト)とあり共にカミムスビタマとカミムスビノミコトで、同系の人物と思える。この系図は初期入部の会田氏が勧請した天道神社に、先祖を記して納めたものである。

広田寺伝来海野真田系図



二十二代海野
小太郎信濃守
幸則

二十三代海野
小太郎信濃守
幸義

二十四代海野
小太郎信濃守
幸敬

二十五代海野
小太郎信濃守
持幸

二十六代海野
小太郎信濃守
氏幸

二十七代信濃守
小太郎信濃守
幸棟

岩下豊後守

二十八代海野
小太郎信濃守
棟綱

二十九代海野
小太郎信濃守
幸義

(海野正統断絶ス)
左京大夫於信州村上義清ト
合戦之時討死

三十代真田弾正忠
海野小太郎信濃守
幸隆

三十一代真田
源太左衛門
信綱

三十二代真田
真田安房守
昌幸

三十三代真田
真田伊豆守
信幸

法名一徳齋此代ヨリ真田庄
居住而左名ヲ称ス永禄八年
五月十九日卒海野亡ブ時武
田信玄ニ招レテ旧領安堵ス

天正二年五月二十一日於
三河長篠信長ト勝頼トノ
合戦ノ時三十九歳討死ス
法名太室道也

慶長十四年塔高野山六十
五歳卒ス法名一翁千雪

文禄二年右月一日從秀吉公
從仕諸大夫法名徹岩当万治
元年十月十七日卒寿九十二

三十四代真田

内記
信政

三十五代真田

伊豆守
信房

元和三年台徳院様御上落
之時於京都被御仕諸大夫
法名成長一申明曆四月
五日卒寿六十二

八幡大菩薩

天照大神宮

枝葉繁茂之所

春日大明神

越ヶ谷瓜の蔓

福井 猷貞

一中町会田五郎兵衛先祖会田出羽義ハ、天正以前海野小太郎、信州会田ト郎等六家同道ニ而罷越候大家ニ而御殿高場ニ陣屋住居致、今袋町入口ト左之方出羽屋敷道通也、都合七家之者草創ニ而其外越谷村居付百姓拾七軒之旧家有之由申伝候也、出羽屋敷向本町裏ニ御主殿有之候而御初代様御二代様御三代様迄御鷹野并奥羽御大名様參勤交代之御出迎御見送等ニ被為入御成候御殿ニ而、御留主居ハ会田出羽兼帯御留主番并御賄方等之義相兼、浜野藤藏・小杉藤左衛門御主殿附ニ而御紋付御道具等兩人ニ而預り来候、会田出羽伴五郎兵衛代ニ及御三代將軍様宇都宮御騷難之節右御主殿へ被為成候ニ付、五郎兵衛并弟伊右衛門騎馬ニ而鎧の鞘外シ江戸御城まで御先立相勤申候、目出度就御掃城五郎兵衛義、千石被下置御使番ニ可被召出御内意之所、御辞退申上永百姓ニ可被成下置旨願上、弟伊右衛門御奉公仕度由願替候所、高五百石大御番組へ御差加被下置候、

今会田伊右衛門是也、又会田出羽義ハ慶長年中家康公様ト老町歩之御墨付被下置、御殿上通三町五反余之処代ト所持致来、元禄八、左之訳ニ而百姓地ニ成、御墨付之表

老町歩之所馳廻り違者ニ付被下置之者也、

家康

会田出羽ハ

右之外、御馬印金御采配等被下置候所、伊奈半左衛門様ト猶又御墨付御書添被下置候ハ、

老町歩之所馳廻り違者ニ付被下置候旨板倉内膳正殿ハ伺候処不可有相違者也、

伊奈半左衛門

会田出羽とのハ

右之通御書添有之候、又御二代様ト被下置候程ト毛蓑松竹梅三幅対御茶器品ト、又御三代様ト被下置候御陣羽織并御刀ハ会田伊右衛門持参ニ而出仕候、其外御三代様迄之間御成之節ハ御目通ハ罷出、其御主殿ト出羽屋敷へ御成ニ付、其時ト御土産之被下物等数多有之、誠百姓大名ニ而相暮罷在候、然処寛文中御檢地之節ハ右之通ニ而相濟候所、元禄八亥御檢地之節、会田五郎兵衛義騎馬ニ而御檢地奉行衆へ御出迎致、陪臣ト侮失礼之義有之彼是争論ニ

及候へ共、越ヶ谷宿御朱印ハ天岳寺、除地ハ寺社地

ハ外無之、其余ハ不残百姓地也、御先代様御墨付之

義も御代々様御書添無之候而ハ御取用無之御法ニ付、

其旨可相心得様被申聞、殿敷被打立、壹町歩之処三

町余ニ相成申候、右一件ニ付越谷宿御縄ハ一体ニ詰

り申候、尤会田出羽義、越谷中興草創之者ニ而中町

組ハ一手持限、本町・新町・神明下・荻嶋・花田・

七左衛門村・西新井村・登戸・瓦曾根近村ニ多有之、

会田之義ハ、其村ニ而地守支配等致、苗字定紋等

拝領之者、正徳年中五郎兵衛退転致候後、系図并御

墨付拝領物等之義ハ、日本橋向角会田屋平吉方ニ

遣候由、猶其後会田伊右衛門様へ上り候由、落居之

頃会田七家と申、元和御檢地請候者大略左ニ相記、

会田 出羽 中町大屋敷主伴五郎兵衛、伊右

衛門奉仕、八郎兵衛七左衛門新

田ハ分地、

会田八右衛門 本町北大屋敷、中古分地九郎兵

衛退転、

会田七左衛門 出羽一族政重開発後神明下組居、

伊奈家奉公、又一説あり末ニ記、

七郎兵衛等、五郎兵衛ニカク

会田四郎兵衛 東大屋敷名主六左衛門家、貞享

二分地会田久右衛門、

会田平兵衛 元禄度年寄、出羽老職之者、茂

左衛門家也、

会田 清藏 南名主大屋敷、出羽老職之者、

清兵衛家也、

右之外越谷・大沢近郷近村ニ会田姓名乗候者不可枚

挙、是ハ海野党落居之節付来候者、又ハ地守家守下

人拝領之者多有之、或ハ近代ニ至候而ハ支流分家之

者も多ク、末党ニ至候而ハ悉不相分候、外姓之者も

会田出羽威殿に連其時代にハ改姓致候者も盡有之候

趣なり、

越ヶ谷の瓜蔓

中町組

一 中町大屋敷会田五郎兵衛義、正徳年中ハ享保初年ニ

至退転ニ及候ニ付、大沢町嶋根喜兵衛方ニ而享保年

中ハ所持之、代名主・問屋差出し相動来候、元来会

田出羽事ハ海野小太郎之子孫ニ而信州会田ハ天正年

中越谷村ハ蟄居、越谷領一円に所持致居候処、元和

之御檢地ニ而百姓名所ニ請、枝郷分ケ村も出来致候、越谷御殿^ニ 御三代様迄被為入御候節ハ出羽妻子共御出迎等仕品^ニ被下置候品物多、其上宇都宮御騷動之節勤功も有之、弟伊右衛門五百石ニ被召出 御朱印も頂戴致候家柄、三度之御檢地共打始之事ゆへ内出五郎兵衛と申、駈廻違者ニ付頂戴之地面、故有之百姓平地ニ相成申候後、無程退転仕候、越谷会田党之本家也、今其子孫日本橋老丁目角酒屋会田屋平吉是也、其上会田伊右衛門殿弟之家大御番組也、右家什物 家康公様^ニ被下候猩々毛蓑金采配御茶碗唐頭ニ御差添 御二代様御認之三幅对掛ケ物御手道具御三代様^ニ馳廻り之御朱印是ハ元禄八伊奈備前守様^ニ上ル、陣羽織御手道具御差添、御老中様^ニ御書付品^ニ等会田屋平吉方ニ而所持之仕候、越谷宿同領内等ニ而会田姓名乗候者多有之、分地又ハ拝領苗字縁有之手前付也、既出羽屋敷・出羽堀・馬洗場・表門通り・袋町突当り之義、出羽屋敷御殿境等之並木も残有之候、可惜事ニ候ハ御使番千石之被召出を辞退弟差出し、楽好之百姓ニ候ヘ共、町家百姓之没落ハ取止処無之候、大略会田党之訳荒^ニ左ニ記置之候事、

一海野小太郎子孫

会田出羽

会田五郎平 嫡子

会田伊右衛門 二男 大御番組高五百石

会田六左衛門 三男 会田六左衛門新町東名主也

会田七左衛門 四男 養子 神明組之先祖

会田八右衛門 親類分 三嶋家養子ニ行会田ト改

会田八郎兵衛 五郎兵衛梓新町之八郎兵衛也

会田久右衛門 六左衛門分家、

会田六郎兵衛 五郎兵衛弟

会田九郎兵衛 元禄以後八右衛門方隠居

会田八郎兵衛 五郎兵衛梓、七左衛門弟分ニ而七左衛門村へ遣し、

会田清兵衛 新町南名主

会田権四郎 本町

会田彦右衛門 同こく市

会田浅右衛門 小林村

会田伝次郎 四丁野村

会田茂兵衛 荻嶋村

会田平 六 同村

会田弥五左衛門 大沢町

会田忠左衛門 同みなと屋

会田利右衛門 同天酒屋

会田菊治郎 同篩屋

会田弥三郎 同豆腐屋

会田弥兵衛 新町 こんにやく屋

同 庄兵衛 同 同分地

同 弥右衛門 同 同分地

会田利右衛門 中町カヂヤ

会田忠兵衛

越ヶ谷瓜の蔓

一 会田出羽義御入国之節、越谷ニ大家ニ而罷居陣屋住

居、今云袋町入口、御殿ニ向罷在候而 御三代様宇

都宮御騒動之節、右之者方へ御越被為遊候ニ付、御

先立相勤被為遊 御掃城候依功千石御使番ニ可召出

処御辞退申上候、依之弟伊右衛門五百石大御番ニ

被 召出候、其節五郎兵衛義ハ騎馬ニ而御案内脇相

勤候、居屋敷

家康公様御代 伊奈様虎御印

御朱印ニ而被下置表

老町歩之処馳廻り違者ニ付被下置者也、

右之通板倉内膳正殿へも伺候処不可有相違も

の也、

寛永

伊奈半左衛門虎御印

会田出羽とのへ

右之通之家柄ニ付 御初代様 御二代様 御三代様

ノ品ニ被下置物等有之候得共、元禄八御檢地之節

迄 御代ノ様御書添も項載不仕候ニ付右 御朱印斗

ニ而難御取用旨御檢地奉行衆ノ被仰聞、百姓地ニ御

繩被仰付候、乍然此義ハ一体会田五郎兵衛と名乗、

越谷之者杯ハ慮外打仕置等も御入国時分迄ハ我儘ニ

取計候而、中町分名主ハ下代名主問屋等差出置、殿

様同様ニ差心得、御檢地奉行衆、越谷組御移之節陪臣

と侮、騎馬黒縮緬之頭巾ニ而出迎致候而及争論候ノ

事起り、御取用ニ不相成旨ニ而平百姓同様御取扱、

夫々無程五郎兵衛義ハ及退転候、越谷会田之元祖也、

御馬印

御采配 一町歩之御墨付
台徳院様三幅對
狸ノ毛ミノ

清和源姓 後改 会田氏 本氏 家 丸ノ内 二ツ引
海野 郡 紋 九ノ内 三本竹
遊野姓 左 六文銭 二ツ巴

会田氏元海野小太郎広道之末流ニて代々信州小懸郡海野村住居、子孫属小笠原家数代有戦功、至小笠原信濃守長時終為武田信玄矢利避旧領信州上京從士悉流浪、於是会田將監幸久嫡男会田出羽資清牢人也、後至弘治初属北条氏康氏政子領武州地元祖母父之名不相知 会田出羽資清惣領 会田出羽資久 歳不相知

天正十八庚寅年相州小田原北条、為太閤秀吉滅亡同八月

東照宮関東御入国之度、越ヶ谷辺被為成之刻、資久初て奉拝謁其後新方領増林村之内御茶屋御殿有之所、越谷領御鷹野御成之節出羽屋敷林等被遊上覽場所宜敷候ニ付、地面可指上旨被仰付則奉指上、御殿并御賄屋鋪共出羽所持之地面之内被遊御建度、入御之節出羽并妻御目見被 仰付奉蒙 御懇意之上意、其上御馬驗鐘馗之御小旗・御紋付御団扇・東照宮御筆鶴之御絵於御前被下置候

台徳院様度、被為成、出羽夫婦御目見被 仰付奉蒙上意、然ル処宇都宮御座之節忍道御案内出羽被仰付御供仕、其節森川七太夫、久世三四郎、会田出羽一所御用相勤、彼是為御褒美畑耆町步被下置、伊奈備前守書判印形之一通被相添被下之、右拝領之品、并書面出、羽次男会田又六資忠家代、所持仕候、右会田出羽武蔵国越谷領天嶽寺江葬申候 右書面写

急度申入候、仍其方御公方御用能、被走廻候ニ付て、為屋鋪分ト畑耆町步被下候、長ク所務可被致候、弥御用可被走廻候、右之通本多佐渡御存知候間如斯候仍如件

慶長十三年 伊奈備前印形

申五月十八日 書判

会田出羽殿

先祖生国武蔵

資久妻不相知 会田七郎右衛門資重
母不相知

権現様従父会田出羽拝領仕候田地屋敷相続、武州越谷ニ罷在候

台徳院様 度々越谷江被為成候節御目見仕、拜領之田
大猷院様 度々越谷江被為成候節御目見仕、拜領之田
地屋敷相統仕越ヶ谷住居仕候、正保元申年七月廿七
日病死仕候、越ヶ谷天嶽寺江葬申候、

資重妻不相知、資重惣領譜末有之

資重二男 会田又六資忠

右会田又六資忠家筋当時町家罷在候

初代 生国武藏 母 不相知 元名虎之助

会田小左衛門資信

歳不相知

大猷院様御代被召出寛永十癸酉年二月五日御切米三
百俵被下置御小姓相勤、其後年号月日不相知貳百俵
御加増被仰付、正徳二乙酉年五月四日大御番植付帶
刀組江御番入被仰付、慶安二己巳年六月廿八日病死仕
候、江戸牛込横寺町大信寺江葬申候、資信妻不相知

二代目 生国武藏 母 不相知 元名不相知

会田小左衛門資盛

歳不相知

殿有院様御代慶安二己巳年九月七日父小左衛門家督
被仰付、寛文四甲辰年十一月十八日大御番米津出羽
守組江入

常憲院様御代元禄八己亥年四月六日大坂御弓矢奉行
被仰付相勤申候処、病氣ニ付御役御免小普請組久貝
因幡守組江入、宝永四丁亥年九月五日病死仕候、江
戸牛込横寺町福寺江葬申候、

資盛妻神田御殿御持箇頭神原七郎右衛門政勝女、
資盛惣領譜末有之資盛二男御勘定吟味役、板花友之
進昌教、

年号月日ハ不相知奥御針医、板花檢校養子罷成候

三代目 生国武藏 隠居名追符

会田伊右衛門資刑

母神田御殿御持箇頭神原七郎右衛門女

常憲院様御代天和三癸亥年九月廿五日從部墨住大御
番江御番入被仰付安藤丹波守組江入、元禄二己巳年
閏正月廿八日桐之間御番被仰付、同年三月廿四日宝
永十二丁亥年亡父小左衛門跡式被下置

有章院様御代正徳五乙未年五月廿七日御代官被仰付
有徳院様御代享保十七壬午年六月廿二日願之通御役
御免小普請組福嶋左兵衛組江入、寛保元辛酉年九月
八日八拾歳ニて病死仕候、江戸牛込大信寺江葬申候、

資刑妻御馬医相勤申候、飯塚七兵衛政侍女

資刑惣領、譜末有之候

資刑二男御勘定吟味役 元名不相知 板花友之進昌興、

年号月日不相知伯父板花友之進昌教養子ニ罷成候

四代目 生国武藏 元名勝之丞

会田伊右衛門資敏

母御馬医相勤申候飯塚七兵衛政侍女

有徳院様御代元文五^庚年七月廿五日父跡式被下置

候旨本多中務太輔被申渡、小普請組阿部伊織支配罷

成、同年十月晦日大御番菅沼織部正組江御番入被仰

付、戸田和泉守組之節

惇信院様御代寛延二^己年六月廿三日御代官被仰付

安永五^丙年十月廿六日支配所石見国大森陣屋ニテ

六十一歳ニテ病死仕、同所勝源寺江葬申候、

資敏妻吹上御広敷番之頭森惣右衛門正紀女

資敏養子惣領譜末有之、資敏実子惣領会田勝之丞、

資敏母譜末有之 惣養子 会田伊右衛門資益妻

五代目高五百石武藏国崎玉郡之内

元名彦彦郎 会田伊右衛門資益

歳五十八私儀

惇信院様御代宝曆九^己年七月六日願之通惣養子被

仰付候旨西尾隠岐守殿被仰渡候段一色安芸守申渡候、

養父会田伊右衛門御代官相勤罷在候所

浚明院様御代安永五^丙年十月廿六日病死仕、安永

六^丁年四月廿六日父跡式被下置候旨於菊之間ニ御

老中御列座、松平周防守被申渡小普請組長谷川利十

郎支配罷成、天明二^壬年二月四日被為召候処病氣

ニ付登城不仕、同月十一日出勤仕候処大御番江番入

被仰付青木甲斐守組江入、同四^甲年三月十二日水

野壱岐守組罷成、同七^丁年三月十七日加納備中守

組罷成、同年七月六日京極備前守組罷成、同八^戊中

年六月廿一日堀田豊前守組罷成候、妻右私妻天明四

甲^辰年十一月十七日出奔仕行衛相知不申候ニ付其節

御届仕候

実子惣領会田金三郎資昌

右金三郎儀天明二^壬年七月朔日 御目見江仕候、

同七^丁年十一月四日御番入願差出申候

次男会田門三郎資勝 私手前ニ罷成候

女子大御番堀田豊前守組伴野平治郎貞真妻、

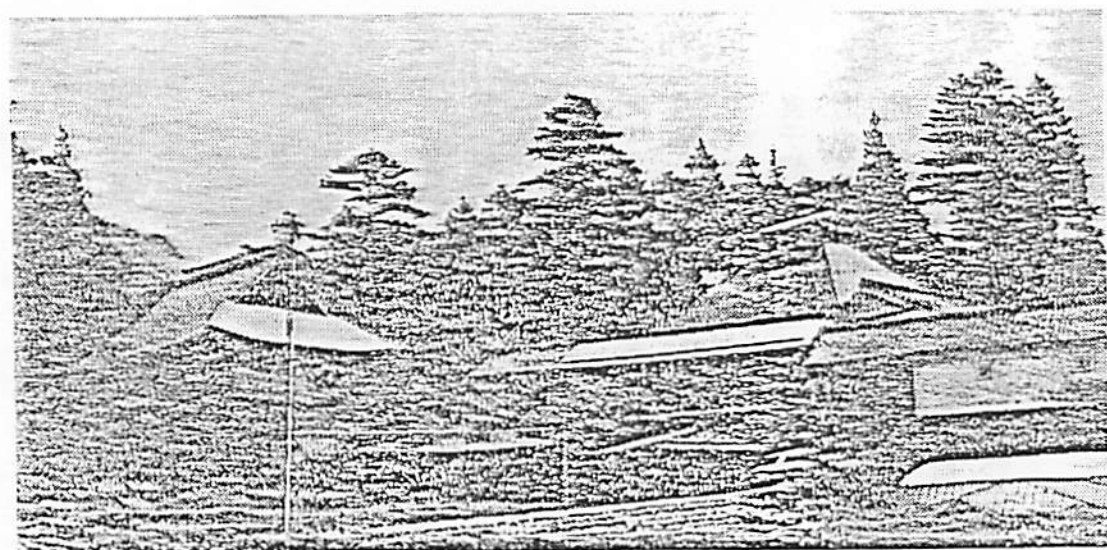
女子小普請組石河彦岐守支配加藤次左衛門照莫妻
右之通り御座候以上

寛政四_三年

会田伊右衛門

右会田氏系譜書は私幼年之節、越ヶ谷宿入口及大戸氏ニ為手習年月を贈ル事久敷、其頃数多之傍友手跡稽古日々あつまり無怠又は双紙之かな本杯一回々持寄互々写シ為写徒々数日送り、多く之書本致し有之内誰と無覚何之間々哉此系譜写置事此節ニ至見出し、然ルは大勢之傍友之内会田氏所縁之童子有之故ニ、家内之密書持出し候を無何心是を写置候と相見江、勿論越ヶ谷宿之内得と相尋候へ、会田氏之子孫并々系譜訳ヶ其外共聴と可相分事々相聞候

明暦三百年御日記之内写略文



第142図 広田寺全景（会田氏の菩提寺）

右端に見えるは虚空蔵山峰の城、山内の左川をへだてて会田家がある。

信州会田村より見た会田氏

会田村広田寺由来

長野県東筑摩郡四賀村大字会田に福聚山広田寺があるこの寺の由来を見ると次の様に記されている。

「広田寺過去帳前書」「信府統記」「広沢寺史料」
（広田寺の本寺で松本市林）「信濃名僧略伝集」その他の既刊著書、寺伝等により考証すると凡そ次の様な事になる。

広田寺の前身、知見寺（天正九年の堀内文書等）が開創されたのは、室町時代の天正年間（一五〇四―二〇）で松本林城の南部にある禅宗龍雲山広沢寺の四世中興雪江玄固和尚を開山とし、当時の会田氏岩下豊後守（地久院殿天窓城高居士）を開基とし中興されたという。（広田寺過去帳）

室町時代の末となつて、会田氏は松本小笠原氏の手を離れ、武田信玄に降つたが、この間の事情は武田氏の謀将中に真田幸村の祖父真田幸隆の如き人物が居り、種々周旋した結果と考えられる。

会田氏は小笠原氏と縁を断つた後、武田氏滅亡までの軍役を勤め各地に転戦したが、天正十一年（一五八三）松本の深志城を回復した、小笠原貞慶（長時の子）の為に討伐を受け、寺も城も兵火に焼かれて亡んだ。

時の住職四世の利天等俊和尚（文禄三年没）は開基の位牌を抱いて山中に難を避け、翌年寺の西北に会田塚を築いて、遺品を収め会田氏一類の亡霊を弔つた。

その後江戸時代太平の世を迎え、会田宿が結成され、寺の再建も新しい壇徒によつてなされた。知見寺が広田寺と改められたが、その年次は定かではない。

資料提供者 会田村郷土研究家

会田小次郎殿居館社及御塚

花村 実氏

会田村字会田町の北、内津川の東にして、長安寺より広田寺に及ぶ南に緩かに傾斜せる一帯の地を会田村字殿村と云ふ。

殿村には、虚空蔵山城主会田小次郎殿の居館ありし所に於て、殿村の名称も亦、居館ありしに起因するもの云ふ。

殿村の内にて、会田小学校の北東裏、三ヶ村組合隔離病舎のある畑地は、多大の人力を費して地均ししたる土地にして、東西四十三間、南北五十間の扇型にして、千三百十二坪あり、会田氏の居館ありし所と伝ふ。

信濃国筑摩郡会田古城記中には左の一節あり。
「会田の里は、保元年中より天文二十二年迄海野小太郎信濃守二男会田小次郎御持也、御知行三千貫文、小次郎広政公御本城（居館の事）より壹町拾間下に城下町（会田町の事）あり、御本城より丑寅の方壹里四町拾八間、虚空蔵山古城地本城平（東西二丁、南北十九間）石垣二段あり」と、以て居館社なるを証すべし居館に立てば遙かに虚空蔵山城を望見する事を得べし

古城記中に

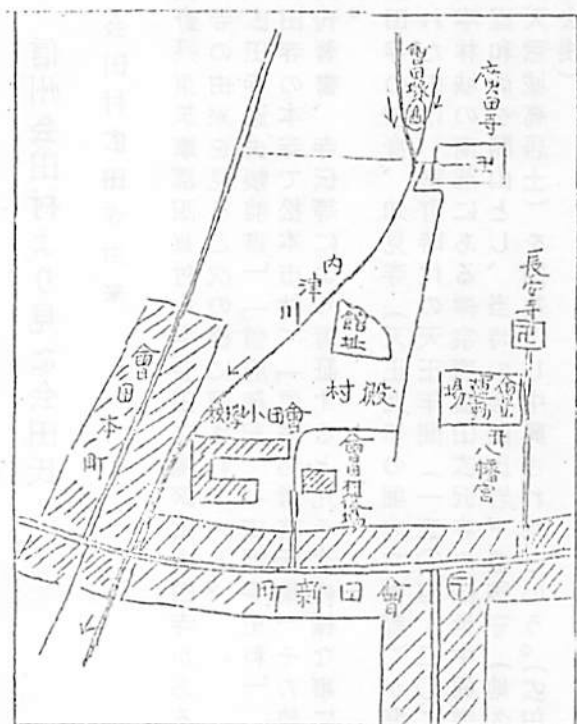
「広政公御領地は、小岩井、両瀬、金井、原山、横川召田、長越、藤池、取出、穴沢、会田町（本町・新町）の十一ヶ村」なる事を記せり。

殿村の内にて、会田小学校運動場東南隅、長安寺大門西側に鎮座せし右座八幡は、会田氏の守護大武神なりしが明治四十三年宮本神明宮へ合祠せらる。

会田御塚

会田小次郎御塚と伝ふるは、広田寺総門前、御経橋の北、眼下を流る、内津川の辺り、永井原の南部に、しだれ桜一幹立てる、四十坪ばかりの芝原あり、昔はここに二抱へもありたる松の太木ありしが、大正三年頃の大風に吹き倒され、他に一抱へ半もありしハクジは三十年前に老木となりて枯損したりと云う。

桜樹の下に石仏一基立てり、僅に梵字キヤカラパー(空風火水地)を刻せる塔婆の意)を刻せるを認む。何代目の小次郎なるや明かならずと雖も「会田小次郎の古跡の花は幾代散らざる糸桜」と唄はれて贈災せり。



広田寺過去帳

今より四百二十余年前、文龜・永正の頃、玄圃和尚、会田の里に巡り来りて錫を止め、一字の草庵を結び、朝夕読経し、融通念仏を唱へて、衆生も回向し専ら法門を輝し居りし故、郷士会田殿の御婦依する所となり、ここに於て小岩井の庄より八町余間隔りたる所(今の会田村知見寺屋敷に堂宇を造立し福聚山知見寺と号し、永正六年御開山式を挙行し、会田殿の御菩提所と定めらる。かくて会田殿御開基として御尊牌を安置し御代々の靈位をも納め給ふ。

文龜元年
一運抄香大弁

大明土古
妙会禪尼

口口
全用宗越

口口
華月道香

長享三年
三宗永去居士

同
妙珍

元龜三
宗心

同
的岩久端

永正
心月宗無

永正
無相永繁

永正
桂月全香

御開基

地久院殿天岩淨光居士下カミ住持也

御開山雪江玄圃和尚 永正八年九月二十日

前物持當寺開山雪江玄圃和尚 禪師

とあり、良雄は廣田寺第十四代遠藤良雄にて永正八年正月十九日寂歿す。

福聚山広田寺 (信府統記)

広沢寺ノ末也、会田与会田町ニアリ。当寺ハ林村広沢寺四世雪江和尚ノ開起セシ禪刹ニシテ、草創ハ永正年中

也。元來知見院ト号ス、因ツテ今ニ於テ其処ノ小名ヲ知見寺ト唱フ、会田ノ住岩下豊後ト云フ人ノ建立ナリ。天文年中ニ昔ノ知見寺ヲ今ノ境地ニ移シ、今ノ寺号ニ

改ム。「豊後法名 地久院殿天窓城高大居士」ト古ヨリノ位牌ニアリ。

◎滋野氏系譜

中川村召田天道山ノ祭神

神皇正統記

天道根命

東人

神武天皇ノ朝
紀國造トシ

大和國葛野郡楠原ヨリ楠原造ト称ス
天平勝宝元年(四二〇)敏和寺トシ
姓伊蘇志屋ヲ賜ル

家譜

尾張守
延壽元年(四四二)
滋野常雄、姓ヲ賜ル
滋野氏ノ祖

貞主

貞雄

弘仁五年甲
姓滋野朝臣ヲ賜ル

恒隆

從三下滋野朝臣
貞觀十年一月(一五二八)
信濃介トシ

恒成

五六位下
同福介トシ

幸俊

五六位上中馬權助
天曆四年三月(一六〇)
信濃國相月ノ牧野朝臣トシ
下向ス

幸経

信濃介
天延元年九月(一六三三)
海野社ノ下向トナル

幸明

海野
小太郎信濃守(滋野氏祖)
小縣郡川西郡ニ居住

直家

根理小次郎(根理氏祖)
小縣郡川西郡ニ居住

重俊

朝三月三郎(朝三月氏祖)
北佐久郡西郡(朝三月)ニ居住

幸真

海野小太郎信濃守

幸盛

小太郎信濃守

幸家

小太郎信濃守

幸勝

小太郎信濃守

幸親

小太郎左衛門尉

信濃守
保元ノ乱(一八二六)ニ
義朝ニ扈シ東國ヨリ
京師ニ上ル

從五位下

幸義

幸廣

木曾義仲ノ一將トシ

横田川原ノ陣ニ参加ス

壽永三年(一八四三)

越中保利加島籠城ノ戦ニ
参加ス

幸氏

建久四年三月頼朝ニ從ヒ

信濃三原ノ將爲ニ出ス

建久五年八月(一八三四)

富士藍沢ノ夏術ニ参加ス

幸繼

建久三年八月(一八九七)

鷲岡ニテ流鏑馬ノ會アリ

是時時頼之ヲ視ル

武田信光小笠原長清

相見月夜露下遊ビテ于馬

ノ四天玉ト云ハル

幸春

海野小太郎

左衛門尉信濃守

次郎小縣郡居住

幸持(合目小次郎)

東筑前郡合目村

虚坐三藏山ニ城ヲ築ク

幸次(塔原三郎)

東筑前郡中川村

塔原ニ城ヲ築ク

幸國(田澤四郎)

東筑前郡田沢山ニ城ヲ築ク

五郎(菊屋原五郎)

錦部村石屋原舊在根山ニ城ヲ築ク

幸元(光六郎)

上川手村光仁場山城ヲ築ク

女赤部六郎五郎

海野本泉
三郎白次
小次郎
元中
小縣郡居住

塔原系

從不明

從不明

元代

◎ 幸ノ子言 日本百科大辞典 中 滋野

小縣郡誌

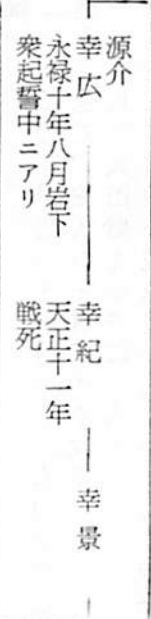
東筑前郡誌

海野会田と岩下会田の交替

以上二つの系図は、会田村に残る資料であるが、前者は滋野氏よりのもので会田次郎幸持が入部当時勧請した滋野氏の先祖を祭る神社に奉納したものであろう。

後者は、会田豊後守玄藩が、南北朝併合（明德）の頃入部した以後のもので、海野真田系図と云えるものである。

- (1) 滋野系図では、幸経で、海野真田系図には二代幸恒で共にニキツネと読み同人である。
- (2) 前者は、会田次郎幸持の分系を表したもので、時代は幸持の入部当時、神社の勧請の時であり、後者は、海野小太郎七郎幸春、又海野小太郎左衛門尉信濃守としているが、別系図には真田七郎となつてゐる。海野が亡んで後真田が総領家を相続したので、豊後守の系別を明白にしたものである。
- (3) 二十三代海野小太郎幸義の弟に岩下豊後守が記されている。小泉郡史海野系岩下氏系図には、



甚左衛門尉 幸豊
天正十八年上州 藤岡ニ移ル

- (4) 二十九代海野小太郎信濃守幸義左京大夫、村上義清と合戦討死とあり、三十代真田弾正忠海野小太郎信濃守幸隆と二重に名を記してある。幸義・幸隆共に二十八代棟綱の子である。この代より真田庄居住、永禄八年五月十九日卒武田晴信に招れて旧領真田に帰る。本家海野家は断絶したが、武田晴信により義隆が海野氏の総領家を継ぎ、一応海野小太郎を称するが、真田旧領を安堵され、真田に住居し真田を称したものである。

以上の如く海野会田と岩下会田の交替時期は、南北朝併合の明德二年（一三九一）より大塔合戦永六年（一三九九）の間である。

越谷会田出羽系図中に会田出羽介重清明徳二年内野合戦の時、小笠原長基に属し、会田宗清は明德三年小笠原長秀に従つてゐる。小笠原は代々尊氏以来北朝方であったので、信濃の守護に任せられてゐる。

岩下豊後守玄藩は、海野幸義の弟で、衰微したとはいへ南朝方であつたので、南北併合しても守護が北朝では不満である。国人等は一揆を起すが、この中に岩下会田が参加してゐる、この大塔合戦には岩下会田を称してゐるので、本領岩下村と会田に別れ豊後は会田に移住した

事が明白である。岩下系図中には、初代幸久豊後守以後、豊後を名乗る者は一人もいない。会田村広田寺には、岩下豊後守玄藩開基とあり、地久院殿天窓城高大居士の位牌も残り、後代にも豊後を称する者が見えるので、豊後守系岩下の本拠は会田村である。

会田村の村史によれば、長安寺・右座八幡宮・宮本神明宮の有る地が海野会田氏のもので、知見寺・広田寺・殿村は岩下会田氏時代のものと云える。

大塔ノ合戦

明德三年（一三九二）南北朝合併が成立して、信濃は守護に小笠原氏がなる。代々北朝方として信濃国人等南朝方を圧迫していた小笠原に対し、反感を持つ武士も少くなかった。

小笠原氏は、甲斐源氏の加々美氏の出で、頼朝の信が厚く、加々美長清が伴野庄（伊那）の地頭に任せられ、信濃に勢力を築いた。小笠原氏は弓馬と礼式の名門で將軍に親任されてきた。

南北朝期には、一貫して北朝方に属したので、南朝方の諏訪・滋野・祢津・仁科氏等と常に対立して来たのである。足利尊氏は源氏の出であり小笠原氏は源氏であり源氏より受けた恩を一途に守つたともいえる。

大塔合戦の起きた原因は、小笠原長秀が足利將軍に頼んでいた信濃守護を拝命し、当時信濃守護所にあつた善光寺に、二百余人の家臣が美麗を極めた騎馬行列で入り挨拶に仕向した信濃諸將に対して、無礼な態度をとつた事にあつた。

南北朝以来の対立の下地のある所に、此の処置に立腹

した信濃の諸族達は、協議し村上氏を旗頭に、大文字一揆等の国人領主等により、信濃全土に及ぶ反小笠原の連合軍を、結成しての戦いとなつた。守護側八百騎、反守護軍四千騎と云はれる。

応永七年（一四〇〇）九月二十四日、小笠原長秀は善光寺から出陣し、更級の塩崎城に入り、大塔合戦となつたが、破れて大塔城に逃げ込む。急の防御の爲糧食も無く、支え切れず城兵残らず城を討て出て討死し、戦は終つた。長秀はよう／＼に城を逃れて京都に歸つた。その後守護職は、斯波義將に移つてゐる。

その後、信濃の守護職は斯波義將に任命されたが、諸豪族は容易に従わず、一年三ヶ月で解任され、以後信濃国は幕府直轄領として支配され、幕府代官が入部してゐる。

応永三十二年（一四二五）十二月小笠原政康が守護に任じられるに及び、やつと信濃全体の頭領としての面目が出て来た。長秀の守護失却後二十五年目に至り小笠原政康により守護職復活がなされたのである。

武田の信濃侵攻と小笠原の没落

守護小笠原家が、一族相争つてゐる間に、甲斐の武田信虎は、信濃制覇を思い立ち度々侵入を繰返す様になる

永正七年（一五一〇）越後の長尾為景（謙信の父）越後

国統一

永正一六年（一五二〇）甲斐の武田信虎（信玄の父）信

濃進入を企て、佐久の平賀成頼を攻る。

享祿元年（一五二八）武田信虎諏訪に討入る。

天文元年（一五三二）府中小笠原長棟（長時の父）伊奈

を統一飯田領鈴岡城に次男信定を置く。

天文七）九年（一五三八）四〇）武田信虎度々佐久に侵入、平賀成頼を殺して佐久大半を手中に納む。
天文十年（一五四二）海野幸義が武田信虎・諏訪頼重・村上義清との連合軍により亡ぼされる。

天文十一年（一五四三）武田晴信は諏訪に侵入、諏訪頼重を殺し諏訪を手中に入る。

天文十二年（一五四四）晴信、小県郡に侵入、長窪城を落す。

天文十三年（一五四五）真田幸隆、晴信の旗下に属す。

海野総領家を継ぎ、旧領真田庄を安堵さる。

天文十四年（一五四六）晴信府中に侵入。

天文十七年（一五四九）正月十八日晴信、上田原戦に村上氏と戦い、晴信大敗し晴信も負傷する。

同、四月五日、小笠原長時・仁科・藤沢等は諏訪に討入、下宮迄放火。

同、四月二十五日村上氏、佐久に攻入り内山城・伴野城を奪回す。

同、六月十四日小笠原長時再び塩尻峠を越えて下宮に打入るも、武田に大敗す。

同、七月十日、塩尻峠の合戦で小笠原長時大敗す。
天文十八年（一五五〇）四月武田晴信、佐久に力を注ぎ春日城を落す。

同、七月晴信、伊奈箕輪城攻め落す。

同、八月晴信、佐久桜井山城に入る。

同、九月晴信、小諸の平原城を放火、望月・伴野晴信の旗下となる。

天文十九年（一五五一）七月三日晴信、林城を攻めるべく、甲斐を進発す。

同、七月同日晴信、村井城に着陣（天文十七年塩尻峠の合戦の後落る）
同、同、十三日熊井城を落し、同日戊亥の城を落す

林本城・深志城自落、林本城破却
同、同、二十三日深志城歟立、惣普請城代馬場民部・日向大和

小笠原長時に最後まで従う者、犬甘・平瀬・菊谷原・麻績等わずかな武将のみであつた。

天文十九年（一五四〇）九月晴信、深志を発ち九日村上

義清と砥石城に対したが、晴信軍敗れて退く。

同、十一月野々宮合戦に、長時方勝利、武田引く。

同、十二月中塔城合戦、小笠原長時は村上義清の援を得て、筑摩・安曇の総力を挙げて結集、深志城奪還すべく兵を催した。村上義清は筑摩塔ノ原城に進出、氷室に陣す。長時の催促に応じた者の内には、先に反逆の者も皆帰復して従う。軍議も決したる後、その夜、砥石に甲州勢来るとの報に、村上義清は長時に無断で川中島に兵を返してしまつた。此の報に違背の者多く出て深志奪還は不能となつた。

失意の長時を平瀬城に迎えた二木豊後守は、残兵を給合して、本城の中塔城に籠る。味方欠落して残兵尅千騎程と云う。

武田軍、中塔城を攻めるも、長時軍決死の戦いに、武田軍敗れて退く。

長時一応勝利を得たが、深志は敵方、国人は悉く背き、村上軍も頼りに足らず、進退極まる。長時は、遂に旧領信濃を避けて京都に逃れるが以後長時は三十年間諸国を流浪し、子貞慶が深志を回復するが、遂に復帰を目前にして、会津にて不慮の死を遂げる。

天正二十年(一五四一)十月十四日晴信、村上義晴が北安曇の丹生子に動くを聞き備える、十五日甲斐を発ち。二十日深志へ着、二十四日平瀬城落す平瀬城主切腹。

同、同、二十七日安曇の小岩岳本城攻撃、宿城放火
天文二十一年(一五四二)七月十二日晴信、再び小岩岳城攻撃、城主生害し落城。

会田麻績攻撃

天文二十二年(一五四三)晴信、会田麻績方面に攻入る
同、三月二十九日晴信、深志を発、午刻刈谷原へ御着陣

同、同、晦日城の近辺放火

同、四月二日午刻、刈屋原城攻落、城主太田長門守

資忠生捕、酉刻塔ノ原城自落

同、同、三日会田虚空蔵山迄放火、刈屋原の敵城を

割る、酉刻、向寅の方御歛立

同、同、九日葛尾城落す

同、同、十五日巳刻刈屋原御立、青柳へ御着陣泊る

同、同、二十二日上杉勢と八幡筋にて対陣、武田勢

敗れたか、退く上杉勢五千

同、同、二十四日辰刻御馬刈屋原へ納めらる

同、五月大朔日上様深志へ御出、麻績の儀落着候由

従大岡・屋代方書状に候

同、同、五日「海下方へ刈屋原の借り地させ被れ候

之に依つて新村へ三百貫は、会田本意の間と御

判形に遊ばされ候得共、海下に永く下被候由仰

遭被れ、跡部御使仕り候」云云

この記述は、この度武田方に降参した、会田の海野下

野守(岩下氏)に同郡刈屋原の太田資忠の跡を、くれようとしたのを、刈屋原城の城代今福石見守が故障した、この為晴信は、海野下野守に新村三百貫之地を替地として与えた時の記事の前書である。

会田の海野下野守は、これにより武田の幕下となり、十騎の軍役を勤めて各地に転戦、信玄無き後武田勝頼は、織田信長に亡ぼされ、後小笠原貞慶が深志を回復するや、会田氏は討伐され、郷里会田から姿を消す結果となつたのである。

上杉勢の反撃

同、九月小朔日麻績小四郎方へ来国光の刀遣は被れ

候、越後衆動、八幡破れ、新砥城自落

同、同、三日土用、青柳を敵放火

同、同、四日山宮と飯富左京と刈屋原へ越候、会田

虚空蔵山城落居

同、同、十三夜、尾見、新戸、忍焼(中略)敵首七

室賀方討捕被れ候(中略)

同、同、十五日申刻御注進、敵夜中に除くの由来る

同、同、十六日窪村源太左衛門高名、敵仁内匠・津

治部少輔・奥村大蔵少輔討捕(中略)為に御

褒美則源左衛門へ此に依り忠節百貫の地下被れ

候(中略)

同、同、二十日越後衆退くの由巳刻申来る(下略)

以上記述は、甲斐武田の信濃進攻は南信・中信の各地を完全に手中に納めた事が記されている。次の弘治・永禄と変ると北信に於ける、川中島の決戦となる。

ここで重要な事は、天文二十二年三年二十九日に始まった会田麻績討伐は、四月二十四日で終るが、次に九月朔日に始まる、上杉勢の反撃である。

上杉勢は、北信川中島方面に退いてたが、九月に入ると、体制をたて直し会田麻績の奪還を企てた。武田は麻績小四郎元青柳に來国光の刀を与えて備えさせたが、その勢に抗し切れず敗れている。

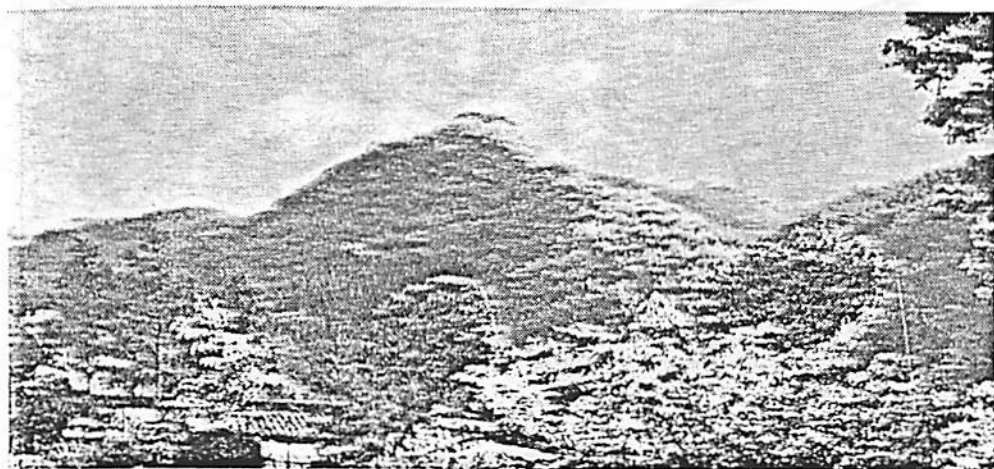
上杉勢は川中島方面より進攻し、八幡を破り、荒砥城を奪回し、青柳城に放火して落し、会田虚空蔵山城迄攻め取つたが、同四日には目と鼻の先の薊屋原城に、武田の援軍が到着して、再び会田城は攻められ落城する。

この戦の時、上杉勢の中に先の戦に一部は武田の軍門に降つたが、それを心良しとせず（主戦派）上杉方に逃れて援を求た者がいる事が知れる。四賀村々史では、真田等の周施により武田に降つた事になつてゐるが、中には強硬派もいて、全員が武田に降つたわけでは無のではないか。上杉勢の応援にて一時ではあつても奪回に成功している事は、会田の残党が先手を勤め悲願達成したと見るべきである。上杉勢の後退により、会田城の回復を断念して再起を期し、武州越谷に落て來た。

越ヶ谷瓜の蔓にある、「落居の節」「信州会田より郎等六家同道にて罷越」とあるのは、この辺の事情を物語つてゐるものである。

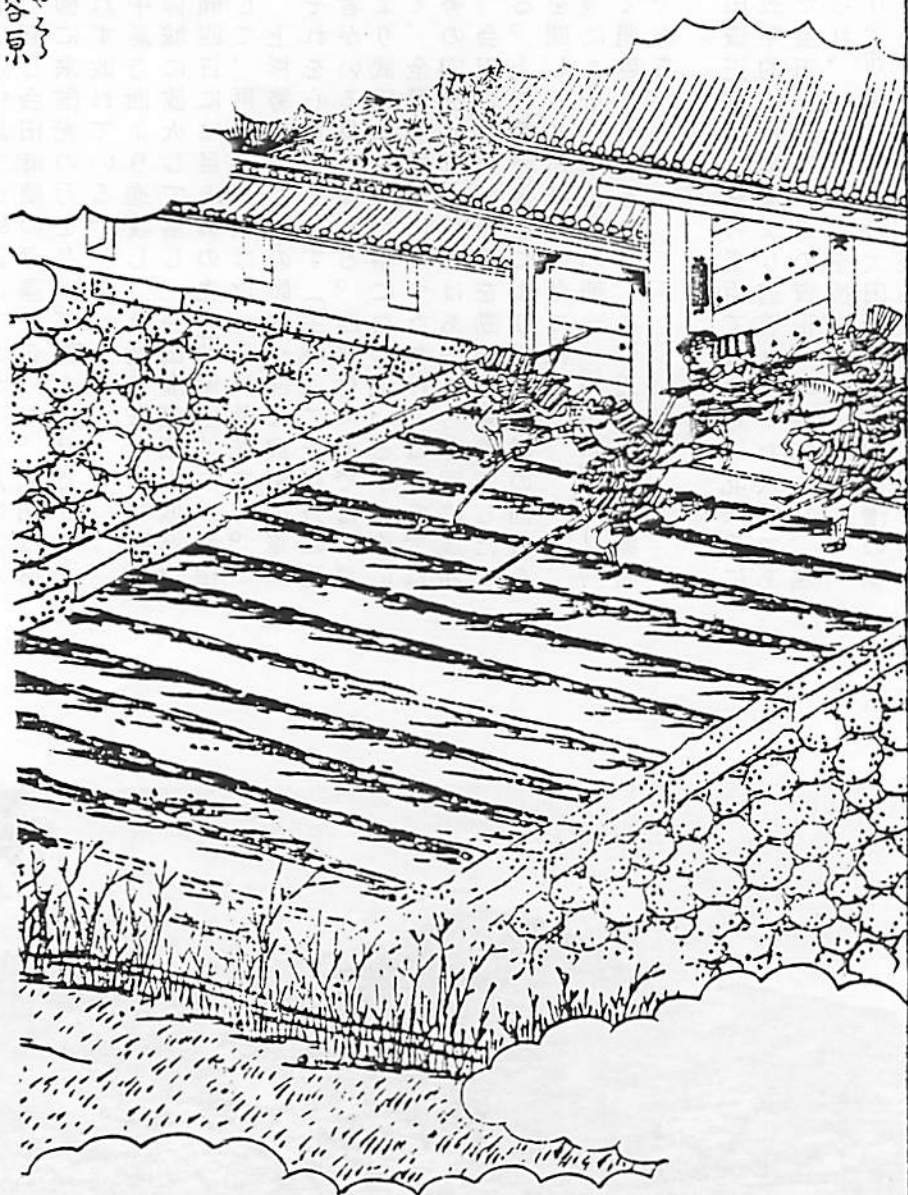
岩槻城主太田資正は、上杉の老臣で最後迄、北条氏に覇向い遂に、政略的に岩槻城より追放となつた人物である。逃れて來た会田一族は、この資正の厚遇により、越谷一円を与えられ、「資」の字を授かつてゐる。

会田城の隣り、薊屋原城主の太田資忠も太田道灌の孫で、小笠原無き後も孤塁を守り抜いた猛勇の武將であつた。



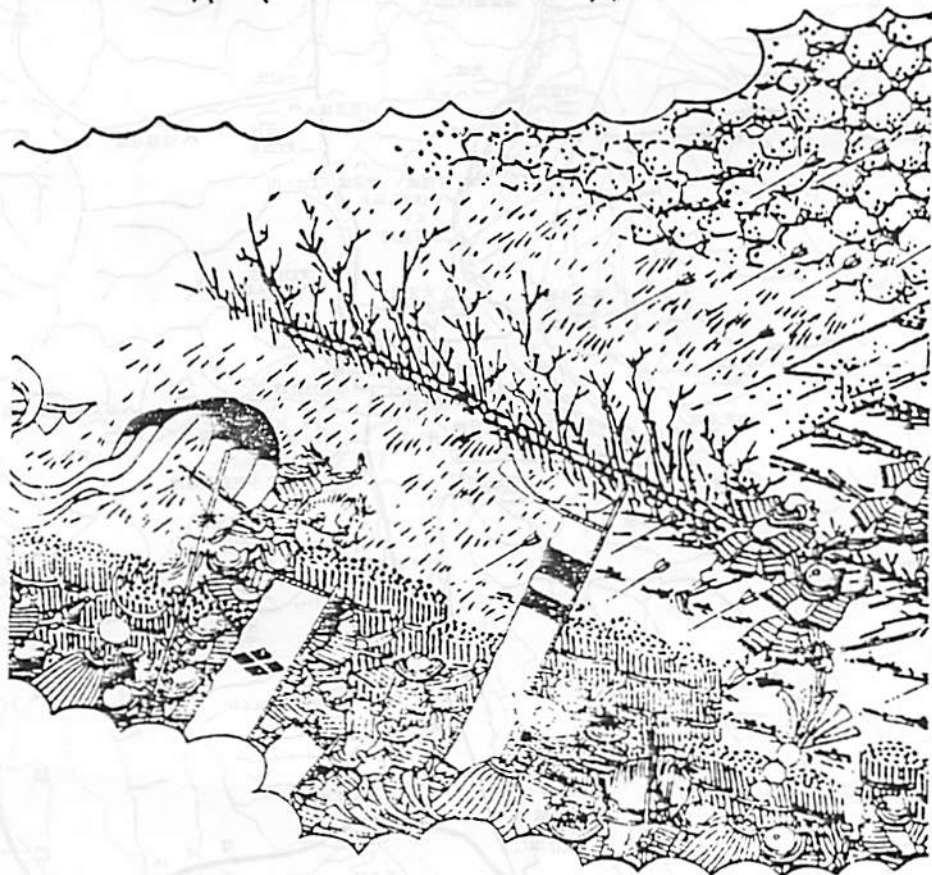
第131圖 刈谷原鷹巢根城址

竹
葉
京

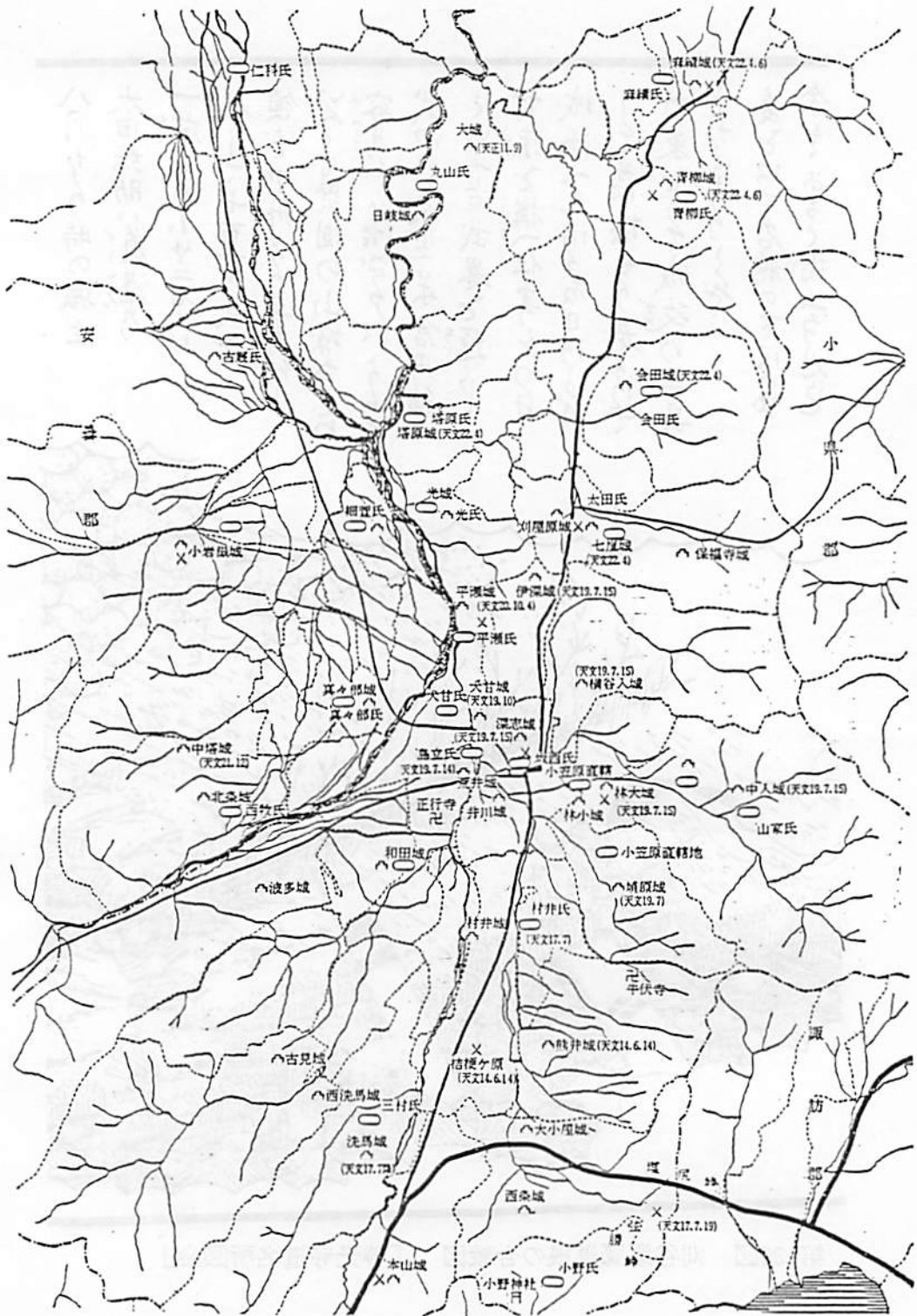


史実としては、合戦の二月に旗りはあるが、江戸時代には『甲陽軍鑑』の記録によりも、
っぱらこの説が行われ、銃丸除けに竹葉を照したはじめとされている

八月かり時の城主
 太田弥助八道灌乃
 一族より小笠原に
 属して七百貫文と
 領も甲州より責討と
 つとも堅固の山塔をま
 容易く落さるゆより
 武田は家臣の本倉丹後
 といふ者武畧と運りし
 竹束と構(構)仕事をつけ
 城降(元清)の夜日らげ
 して落塔せり是よりて
 竹束をりて城攻の要具
 とかきりしげ
 爰を以て名將の下に必
 今きあきと滑(滑)らんじ



第136図 刈谷原鷹巢根の合戦図 「善光寺道名所図会」



第三三二図 武田晴信の府中侵畧と関係諸城 ()内の数字は落城年月日

四賀村城館一覽

⑤ 会田城（虚空藏山城）

会田海野氏の居城で虚空藏山の山体を中心に峯の城・中の陣（本城）・秋言砦・現城・天狗山の砦等がめぐっている。小泉郡の海野氏が鎌倉時代に会田御厨の地頭として入郷したが、現在の会田小學校殿村の地に館し、中の陣を要害城とした。武田氏進攻の際は武田氏に下り、天正十一年小笠原貞慶に亡ぼされた。山上峯の砦の眺望は広く、遠く朝日・山形・波田・梓方面をみる事ができる。中の陣には平石積の石垣がめぐり、三郭部からは炭化米を出す。

○「標高千百三十米、会田中川両村境虚空藏山頂にあり、山上眺望極めて絶佳なり、会田氏の詰の城ならん、又中之陣・秋言此の城の三城を総称して虚空藏城と称するとの説あり【信濃史】」

○「会田虚空藏山古城地 会田町ヨリ丑寅ノ方一里四町十八間、本城ノ平東西二町南北八間石垣ニ段アリ、城主会田小次郎広正居住セリ、会田氏ノ先祖ハ海野幸繼ノ二男初テ爰ニ分領シテ会田次郎ト号ス、是ヨリ広正ニ至テ幾代ニヤ詳カナラズ、真田ヲ名乗リシミアリケルニヤ、初ハ当國衆一味ニテ小笠原ノ旗下ナリシガ、武田家ノ鋒強盛ナルニ依テ、甲州ヘ降テ十騎ノ重役ヲ勤ム、一説会田小次郎中絶ノ時、岩下文蕃ト云ウ者此城ニ居リント云ウ、岩下モ一旅ニテ、近辺ノ要害ヲ守リタリト見ニ。【信濃史】」

「会田町虚空藏城、城主会田小次郎会田ヨリ道法一里四十八間東西二丁南北四間【小笠原分限録】」

○「天文廿二年四月、武田晴信虚空藏山ヲ放火ス。

「三日【肥後】会田虚空藏山迄放火【信濃史】」

○「天文廿一年九月、長尾景虎、虚空藏城ヲ攻ム。

「九月三日土用、青柳ヲ敵放火、四日【文】山宮ト飯富左京ト、刈屋原ヘ越候、会田―虚空藏落居【前同】」

○「宇虚空藏山古城跡老ケ所、東西【文】六間、南北【文】拾四間。右者城主会田小次郎広正殿より申伝ヘ候、武田信玄公ト取合之節、出張之城由、村より北ノ方道法武拾丁余ニ御座候、古城は町裏之地ニ有之、今は畑ニ相成申候【文久三年会田町】」

虚空蔵山城

東京西部四賀村会田虚空蔵山

海拔千三百三十六メートルのこの城は、会田氏の要害であった。頂上の平場は小さいが、石垣が使用され、平場も数段ある。

会田氏は、建長年間(一二四九—三五)海野信濃守幸継の二男広政(広正)が、会田に移住し、会田氏を称したのに始まる。数代つづき、小笠原長棟、具時に仕えたが天文二十二年(一五五三)、武田勢に攻められ落城した。

一説に応永七年(一四〇〇)頃、会田氏断絶して、一族の岩下才吉が城主となり、岩下氏が虚空蔵山城主となったとある。

会田氏の出城として、秋言、中野、雨宿城など数多く見られる。

○ 秋言 四賀村中川

この砦は会田城の支砦で中の陣の東にある。特別な構築部は少ない。

○ 「小岩井秋言古城地、小岩井村ヨリ丑ノ方十四町、本城ノ平南北三十間東西四間、城下ヨリ高サ一町十間会田小次郎取出ノ要害ナリ、家臣岩下トニウ者ヲ置テ守ラシムトモニウ〔信濃記〕」。

○ 「小岩井村、秋言城、城主会田小次郎、村ヨリ丑ノ方道十四町南北三十間、東西四間〔信濃記〕」。

秋言城

東京西部四賀村小岩井

会田氏の出城で、虚空蔵山から延びてくる尾根の端に位置している。

会田氏の家臣である岩下氏または小岩井民部利行の居城といわれ、城主は詳らかでない。天文二十二年(一五五三)、本城とともに武田勢に攻め滅ぼされた。

○ 中之陣城 四賀村中川

○ 「中之陣吉城地、小岩井村ヨリ三貫ノ方十四町程、本城ノ平南北二十二間、東西十九間、城下ヨリ高サ一町十間、會田氏持ナリ。〔傳記。〕」

○ 「小岩井村、中之陣城ヨリ庄實道法二十四丁、南北二十三間、東西十五間〔傳記。〕」

中之陣城 西武蔵郡四賀村小岩井

秋吉城と云ふに、會田氏の山城である。

會田氏の家臣中野三右衛門が天文年間(一五三二―一五四一)には城主であるが、天文二十二年(一五五三)、武田勢に攻め落された。

① 雨戸屋城 四賀村會田・五幡北山

會田氏の支城で、北山の尾根上にある、小規模な遺構がある。

「雨とや山ノ吉城地、會田町ヨリ亥ノ方三十町十六間、本城ノ平東西五間、南北十間、南向ノ城ナリ、長仁斜口押ノ城出ナリ。會田氏ノ家人小三右衛門ト云ク者ナリ。此城ヲ守リケルニヤ。(平略)〔傳記。〕」

○ 「平雨とやノ城、同前、老々所、古者會田氏之家臣、小三右衛門住居、徳由里伝ノ候、村ヨリ亥ノ方凡三谷下。〔天文三

傳記。〕

雨戸屋城 西武蔵郡四賀村會田

會田氏の山城の一つで、雨宿とも書く。東北に長く、南が大平である。

會田氏の家臣小原長房が城主である『信長統記』により、天文二十二年(一五五三)、武田勢に攻め滅ぼされた。

⑦ 岩淵城 四賀村中川藤池

会田川の左岸段丘上にあり、川をへだてて会田虚空蔵山城に対してい
る。平城で堀切の跡があり、館址を兼ねた城である。

○「武田時代会田氏一族、岩淵丹後（豊後ともいう）居城【信濃城跡】」
時代史

○「本城の平、南北三十四間にして、東西北の三面に堀切ありて、南中
川の流れに臨めり。」【本城跡】

岩淵城 東京澤郡四賀村藤池

本城の平は広く、尾根つづきにそれぞれ堀切りで断絶している。

会田氏の将信岩淵豊後守の居城であったが、天文二十二年（一五五

三）、武田氏によって落城した。

⑧ 笹沢城 四賀村五常落水

会田氏の支砦で、会田斎田原の西端、五常小学校の南方に会田川をへだててある。富士山形の小砦であるが遺構を
存する。

○「武田時代会田氏の家臣笹沢監物居城【信濃城跡】」
時代史

⑩ 山笹城 四賀村五常西の宮

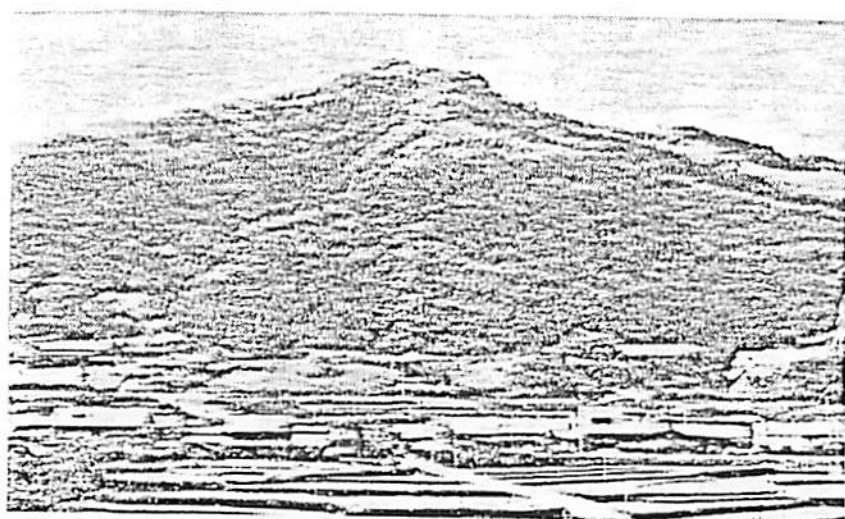
会田氏の支砦で、会田川右岸の山の尾根にある。

○「西ノ宮笹ヶ城跡、西ノ宮ヨリ申申ノ方九町五十間、本城ノ平南北九間、東西六間、会田氏ノ持ナリ【信濃城跡】」

○「西宮村笹ヶ城、城主会田小次郎、村ヨリ申申ノ方九町五間南北九間、東西方六間【信濃城跡】」

⑥ 召田城(覆盆子城) 四賀村中川

会田城の支城で、天正十一年小笠原氏の進攻に対して急造した新城で、別名を覆盆子の城という。覆盆子は一期をとげるの一期で、会田氏一統の亡びた城である。この城は会田城より小泉部に近いたため小泉方面への退避を予定しての築城と思われている。



第139図 矢久一期城 前面藤池・長越部落会田小次最後の城

○天正十年十一月五日、筑摩郡会田家等、上杉景勝ノ援ヲ得テ同郡矢久城ニ籠ル、是日、小笠原貞慶、諸將ヲ遣ハシテ之ヲ攻ム、尋イデ、城將堀内越前守討死シ落城ス。

○天正十年午の十一月、会田の城の者とも越後へ内通仕、河中島より合力を乞、(矢久)やきうの入に小壘を立居申候。

○召田城(覆盆子城)

「召田山覆盆子古城地、召田村ヨリ午ノ方四町三十八間、本城ノ平京西十一間、南北六間、会田小次郎領主ノ時、家人召田監物トニウ者ヲ置テ守ラシム〔傳記〕」

○「召田村城、覆盆子城城主召田監物、村ヨリ午ノ方四丁三十八間、東西十一間、南北六間〔言小三〕分限致し」

覆盆子城

東京摩郡四賀村召田

会田氏の重要な出城の一つで、会田氏の家臣(あるいは小次郎広政の三男)召田監物が城主であったが、天文二十二年(一五五三)、武田氏に攻め落とされた。

① 鷹巢根城 東筑摩郡四賀村錦部

会田海野氏の一族、刈谷原五郎築城と伝えられ、のち室町時代に小笠原氏の部将太田弥助が所有、七嵐の荒神尾城ともい、その要害城としており、武田氏進攻の時はこの城で戦闘が行なわれている。『信府統記』の記事は誤り、『高山茶記』が正しい。

○「刈屋原山鷹住根ノ古城地、刈屋原村高札場ヨリ城ノ上マデ五町四十七間西ノ方ニアリ、本城南北八間三尺、東西五間堀切四方ニ四段アリ。戌亥ノ方ニ用水ノ池アリ、本城ヨリ二町程ナリ。又押ニノ番所構峙マデ三十三町四十九間、当城ハ昔海野小太郎幸継ノ五男、刈屋原五郎ト号シテ刈屋原反町辺ヲ領セリ。其子孫幾代ニシテ断絶スルニヤ詳ナラス。其後太田弥助ト云ウ者居城セリ。(中略)保福寺口ハ小県郡境ナレバ、此辺ノ押ヘトシテ、刈屋原ノ城ニ置カレタリト見ニ。天文二十二年武田ノ軍勢小県郡ヨリ保福寺口ニ攻入、八月五日ヨリ戦アリ。保福寺平ヨリ刈屋原マデノ間即チ其時ノ合戦場ナリ。(下略) 〔信府統記〕

○「天文廿二年四月二日、武田晴信、筑摩郡刈屋原城ヲ陥レ城主太田長門守ヲ生捕ル、同郡碓原城モ陥ル。

「天文廿二年三月十八日^甲於曾源八郎深志へ越テ二度無帰府候、廿三日^甲、午刻向丑方御出馬、廿九日^乙深志ヲ御立、午刻刈屋原へ御着陣、晦日城ノ近辺被放火、四月朔日^丁二日^戊、午刻刈屋原ノ城被攻落、城主長門守生捕、碓原ノ城自落、三日^己、会田虚空藏山迄放火、刈屋原ノ敵城ヲ割、酉ノ刻向寅ノ方御歛立、栗原左兵衛相動ル、八日^甲刈屋原ノ城主今福石見守被仰付、御使典キウ栗原左兵衛^(説) 〔信府統記〕」

○「天文廿二年四月、武田晴信刈屋原ヲ立チ青柳へ入ル。

「十五卯、巳刻刈屋原御立、青柳へ御着陣泊ル。」【新詞】

○「小笠原貞慶ノ臣赤沢式部少輔・荅原三河守等、謀叛ヲ企ツ、貞慶式部少輔ヲシテ自殺セシメ、三河守ヲ誘殺ス。」

「尚々明日時分、此方之仕置、弥以更申候へく、各へも、此由御心得専用候、以上

急度使札、令祝管候、赤沢事種々計策無隠候之条、為切腹候、此表無何事候、かりや原へハ則出雲守相移候、其表

用心無油断被申付事専用候。(下略)

天正十一年

二月十二日

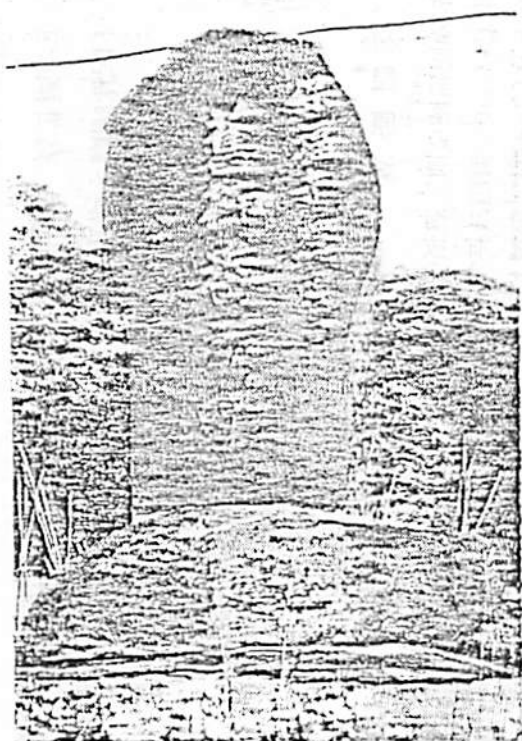
貞慶御判(花押)

六半左殿

【信長公記十五卷 註】
赤沢式部少輔御書通

③ 七嵐城(荒神尾城) 東筑摩郡四賀村錦部

中世末、太田氏の構築に由るもので、山は急峻で、主郭部の眺望もたい。主郭部には石垣が残り土居も残っており、
石垣は東西に延び、北は急峻な山に依り、南は石垣が残り土居も残っている。



第138図 保福寺番所跡旧跡
(この番所は近世までに引継がれ保福寺宿の東端にある)

○「七嵐山光神尾ノ古城地、七嵐村ヨリ申西ノ方指渡シテハ三町バカリ城ノ上マデ道ヲ行ケバ八町程アリ。東向ノ城ナリ。本城東西九間南北三間五尺、高三尺五・六寸程ノ石垣三万ニアリ。用木本城ヨリ二町十五間ニアリ、峯ヨリ三万岩ニテ大崖ナリ。本城ノ辰巳ニ当リ見場ノ城ト云アリ。下ニ見ニ、此処モ刈谷原領ナリ。刈谷原五郎ハ此城ニ居レリト云ウ。(中略) 共ニ刈谷原持ニテ程近キ地ナレバ、両城ナガラ其時落城スル故今ニ三テ何レガ根城

枝城トモ分ケ難シト云々、今モ俗ニハ刈谷原ノ本城是ナリトモ云ウ。『信符』

○「七嵐村城、村ヨリ申ノ方道法三丁東西九間、南北三間南北三間光神尾城主刈谷原五郎後太田弥助〔百小笠分限録〕」

一 荒神尾隱ノ巢窠古城跡 但シ城窠長八間横四間 老ヶ所〔天保九年七月嵐行明細録〕」

刈屋原城

東武野郡四賀村刈谷原

刈谷原部落の西、海抜八百九十七メートルの城山は刈屋原城址といわれている。戦国以前は松本には重要な街道の押えであったが、今はすぐ北に、国道一四三号が通っている。

本城の平を中心に数段の平地と、掘切りが見られ、伊深城址を思わせる。

海野小太郎幸継の五男が弘安年間（一二七八—一八七）、同地に移住し、地名をとって刈屋原氏を称した。代々居城して天文年間（一五三二—一五四）、小笠原長棟に属し、その後深志城に住し、代わって当城に太田道灌の子孫といわれる太田弥助資忠が城主となり、小笠原長時に属した。大永三年（一五二三）のことである。

『高田藩記』によると天文二十二年（一五五三）、武田勢は保福寺より刈屋原城に攻め寄せ、落城した。稲倉城主赤沢氏が武田の家臣となつて、新たに当城の城主となつた。

この戦いで、竹東が仕寄せに使われたと『千曲之真砂』にある。

光神尾城

東武野郡四賀村七嵐

稲倉峠の北にあり、本城は石垣が使用されている。

『信符統記』には、当城は刈屋原城の本城であるかもしれないと載っているが、『千曲之真砂』の「太田弥助の出地也」のほうが自然である。

天文二十二年（一五五三）、武田勢に攻め落とされた。

④ 保福寺城（掻揚城）

東筑摩郡四賀村錦部

小県口の押えとして小笠原氏が築城したもので、保福寺宿の南方の尾根上にある。小笠原氏の直轄城である。

○一保福寺掻揚城地、保福寺ヨリ赤ノ方二町四十二間、本城ノ平南北十五間、東西八間此畷ハ文龜二年（一五〇二）小笠原大膳大夫長棟築カレテ、小笠原信益ヲ置カレ、永正十三年（一五〇三）ヨリ小沢縫殿助在番タリ、此ノ時峠ノ麓ヨリ三町程此方ニ番所立ツ、永正十二年（一五〇二）ヨリ林藤藏是ヲ守リ、永正十五年（一五〇四）ヨリ大永三年（一五二二）末マデ信府林城ヨリ在番年々交代シテ守ル、其後ハ太田弥助刈谷原ノ城三ト成テ、刈谷原ヨリ在番ヲ置ケリ、武田持ノ時ハ小県モ一円ナレバ、此國ノ守リ入ラズ其後天正十年（一五八二）小笠原石近大夫貞豊八國シテ昔ノ家人或ハ与力ノ者トモノ中ニ、浪々ノ時旧訓ヲ忘レザルヲバ召出シ又旧難ヲバ討亡スモアリ、亦此節落失セシモ多シ、天正十八年（一五六〇）保福寺在番小沢縫殿助、即チ城地ノ麓ニ屋舖ヲ賜リ住シテ是ヲ守ル、古河へ所替ノ時供セリ。跡ノ屋敷ニハ縫殿助家人西田孫藏トニワ者ヲ置ク（下略）【付録】

○一保福寺城、峯ヶ上城、城三太田弥助町ヨリ赤ノ方道法二丁四十二間、南北十五間、東西八間【古小笠原】「【三永保十一】保福寺」
「峯ヶ上城、城三刈谷原太田弥助殿出城、御高札より道法城峯迄、武丁四拾間示ニ当ル。【三永保十一】保福寺町御給下下冷津段」

保福寺城

東筑摩郡四賀村保福寺

別名見当城、掻揚城ともい、保福寺峠を越えて侵入して来た敵が、最初に攻め落とさなければ通れない城である。

文龜二年（一五〇二）、林城主小笠原長棟が築き居館を記した。永正十年（一五一三）には小沢縫殿助、永正十二年には林藤藏が城代であった。数年ずつ小笠原氏の臣が居城したが、大永三年（一五二二）に刈屋原城に太田資忠がはいり、当城にその家臣を置いた。

天文二十二年（一五五三）、保福寺峠を越えて侵入した武田勢に攻め落とされた。

しかし『高田藩記』には「天文二十二年三月二十九日深志町御立、午刻刈屋原へ御着陣」とあって、侵入口が違う。

『千曲之真砂』に「見当城、保福寺城二箇所共太田弥助懸也」とあり、保福寺にはあるいは他の出城があったのであろう。

② 見場城 東筑摩郡四賀村錦部

七嵐城の支砦の一つである。

○「七嵐村長命寺ト云ウ寺ノ上ノ山ナリ、是ハ光神尾ノ出丸ト見ニ。見場ノ城ト云ウニト、七嵐山ノ遠見物見等ノタメナルカ故ニ、此号アルニヤ。城中堀切ノ跡ニ一ヶ所アリ。」〔信濃〕

○「見場之城

右本城辰巳ニ当ル。〔三原〕

〔三原〕

〔信濃〕

見場城

東筑摩郡四賀村

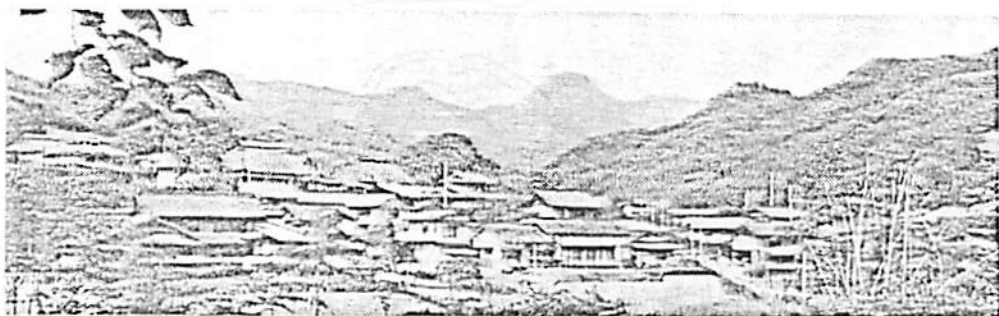
本城の平と二条の堀切りがあり、刈屋原城の物見の城である。長命寺の裏山に城址が存する。

天文二十二年（一五五三）、武田勢に攻め落とされた。

③ 笹ヶ城 四賀村五常西北山と明科町大足の境

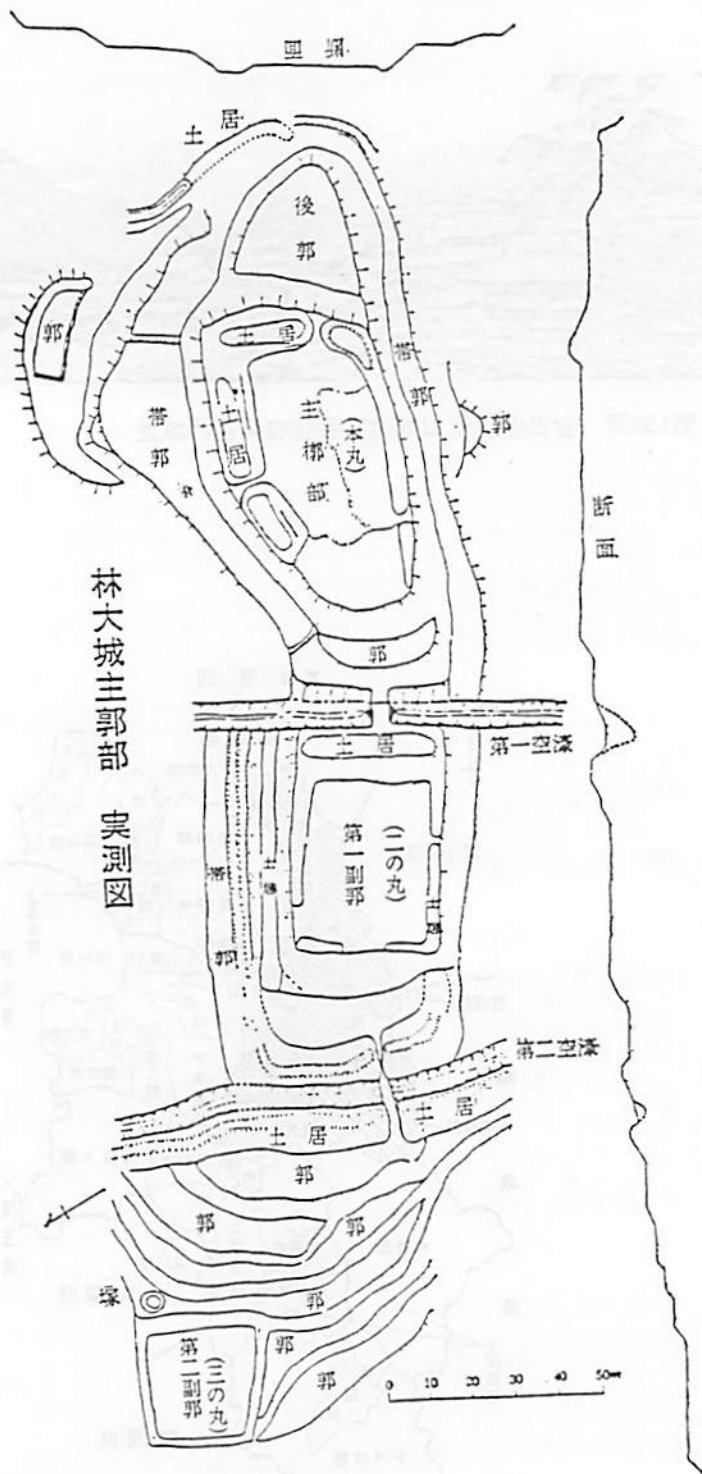
会田氏の西方の支砦で、会田城と安曇平をのぞむ尾根上にある。西北山側に城という地名があり湧水井がある。また主郭部には三峯・八幡の兩社を兩村でまつる。明科町側には堀平の地名がある。

○「北山村ヨリ西ノ方二十一町四十一間。本城ノ平東西八間、南北六間 南向ナリ 会田氏ノ持ナリ。」〔信濃〕



第130圖 会田虚空藏山城遠望手前右側笹沢城址





第三三六圖 林大城主郭部実測

会田氏の滅亡

小笠原貞慶の府中経略

(1) 織田信長の甲斐・信濃攻略の決意は、元龜三年に始まる。

同、十一月十九日武田晴信の、朝倉左衛門督に宛てた書状に、「対信長当敵、干才動候」と当面の敵は信長と述べている。この為信長は謙信と同盟を結ぶ。

同、十二月二十日 織田信長より上杉謙信に送る書状に、武田信玄と一戦を交える決意を表明している。信長と呼応して、一挙に信濃に攻め入り晴信を討つ事を呼びかけている。

同、十二月二十二日徳川織田連合軍は、遠江の三方原で武田軍に敗れ、家康は三河まで侵略される。

天正元年（一五七三）二月中旬には、家康の城野田城を攻め取られるが、武田晴信は、この城攻め中に病を得て帰国の途中、四月二十二日伊奈駒場にて卒す。

(2) 小笠原貞慶が信濃回復を企てる兆しは

天正三年二月二十六日織田信長に、府中復帰を誘われてからである。以来小笠原貞慶は、信長に属し、信長の使者として各地の將に書状を送る使者として、小笠原貞慶の名が見える。

小笠原長時の代に、府中を追はれて京都に逃れて以来、長時貞慶父子の宿願府中復帰への道として、信濃の動向や、関東の情勢を、相当的確に把握していた模様で、為に信長の親任を得ていたものである。

天正五年極月二十二日には北条氏政に敵対する、佐竹義重の党、太田資正・梶原政景父子に使をし、天正八年三月二十二日付越前柴田勝家に対する書状

天正九年十月十五日付、信長越前出陣の前触れ等信長の使として走り廻っている。

武田勝頼の滅亡

信長の、甲斐討略は、

天正十年二月一日、木曾義昌の信長出陣の要請に始まる。此の日突然安土城に、美濃苗木城主苗木久兵衛（遠山友政）から使者がとどいた。

此の時義昌は、弟の上松藏人を人質に添え差出して忠誠を誓った。

木曾義昌の謀叛の報は、武田方にも伝わり、二月二日には武田勝頼・信勝父子・弟信豊等は、甲斐葦崎の新府城自一万五千の兵を率い、諏訪上原城に陣を構えると共に、諸々の口を固め信長の侵入に備えた。

翌三日には、信長は、武田追討計画に基き、甲斐信濃への出陣を諸將に命じた。駿河口から三河の徳川家康、関東口から小田原の北条氏政、飛驒口から金森五郎が進撃を開始し、又信忠等の安土勢は、木曾口岩村口

の二手に分かれて駒を進めた。六日伊豆より河尻与兵衛が戦列に加わり、甲斐信濃は完全に包囲された。信濃の動揺も激しく、在地武將の離反が続く。

二月十六日古幡・西牧氏が木曾義昌に内通、岩岡・織部も深志を離反。

十八日二木一門も甲州方面離れ、小笠原信嶺も下伊那にて織田方に走る。

二十日勝頼は、上杉景勝に援軍を求めた。

二十五日甲斐にて穴山信伊謀叛。二十八日勝頼は、諏訪上原城を引き払い、甲斐新府の館に兵を引く。深志城は木曾義昌の手に落た。

三月二日仁科五郎盛信の死守する高遠城落る。

十一日甲斐新府の館に火をかけ、天目山に逃れた勝頼は自刃す。甲斐信濃の支配者武田氏はここに滅亡した。之により、甲斐信濃は、完全に信長の支配下に置かれた。十七日信長は、飯田を立ち、杖突峠を越えて諏訪に入る。

十九日上諏訪の法華寺にて、甲斐・信濃の武將が拜謁に参集、甲斐から徳川家康到来。

二十日木曾義昌出仕、太刀一腰・馬二疋・金二百兩を進貢した。織田信長は、義昌の今度の戦功を称えて、黄金二千兩を贈り本領を安堵し、更に安曇・筑摩の二郡を与ふる事を約束、帰り際に寺の縁まで見送る程の持て成してあつたと云う。

松尾の小笠原信嶺出仕、本領を安堵さる。

二十一日武田の猛将穴山信尹（梅雪）出仕、甲斐・駿河の本領を安堵された。

二十四日在陣諸將に、深志の城米を分け与え、北条氏政より、白米二千石、徳川家康より兵糧の進上あり、諸將士に宛がわれた。

織田の占領政策を見ると、敵対する者は徹底的に攻めて滅亡させた。支配下に降つた武將は、在地性を積極的に利用し、家臣団の中に組込み、早急に領国支配を完了した事が窺われる。

本能寺の変と深志

天正十年（一五七三）六月二日、本能寺の変により、織田信長が倒れる。新支配が確立されたかに見えた、信

濃は再び無主の状態となる。

東からは北条氏政が、北から上杉景勝が、南より徳川家康が、内より旧族が旧領回復を計り、動乱の様相を程して来た。

六年十二月小笠原貞慶は、徳川家康の援を得て、信濃府中に還座の為「家康御光を以て入国の行、偏へにその方覚悟に候」と後序氏に忠節を催している。

十三日上杉景勝は、更級郡清水三河守に、臣下に下る様求めている。在信旧配下の諸將には皆、誘いの書状が出されたものと思はれ、景勝に味方する者が多くなつた。十六・十八日北信の上杉配下の武將に旧領安堵すると共に、所領を宛行つている。

景勝は、川中島より麻績・青柳・会田を降して府中に入り、深志の木曾義昌を攻め破り、当時越後の上杉を頼つていた、小笠原長時の弟貞種を城主に迎えて、小笠原の旧臣の多い安曇・筑摩の抑えとした。

七月十六日予てから旧領府中回復をねらつていた、長時の子貞慶が、安筑の旧臣を率いて、上杉方の守る深志を攻めた為、貞種は正統である貞慶に城を開け渡し越後に退き、長時の子貞慶が安曇・筑摩を支配する事となつた。ここに長時が旧領を失つて以来の念願の、府中への還座を成し得たのである。

天正十年三月、飛驒越えをして安曇の金松寺に入つた時には、旧重臣二木氏すら小笠原貞慶の存在を知らなかつた。貞慶は天文十四年生れ、林城没落の時六歳であつた。長時の三男として信府林の館に生れ、童名小僧丸と云つた。

長時没落後、父に従い諸国を牢浪し、永禄元年十一月二十三日、元服加冠して喜三郎貞慶と改めた。その器量

才知・氣質特に憂れたる為、父の寵愛と期待を一身に集め「家法を悉く、これに伝ふ」と、弓馬兵法と行儀の法度を継ぐ。

長時は、没落後上京して三好長慶を頼り、摂津の芥川城に十五年逗留、永禄十一年九月二十八日、信長に攻められ落城、越後に御下着、上杉輝虎賓客の礼を以て迎えられる。

その後芦名氏を頼つて会津に至り、星味庵にて三年余り、天正十一年春不慮の死をとげる。

貞慶は、信長を頼み、十四・五年の間、関東・奥州に計策を廻し、小笠原家再興に奔走していた。

天正十年三月、飛驒から入り安曇の金松寺に着き、府中深志を規うが、信長の所領宛行の後の為、目通りもかなわずに引さがつた。

その後徳川家康を頼り寄食す。本能寺の変の後、石川数馬の取なしで、家康の援を受けて、遂に同七月府中深志を回復する事に成功した。

貞慶は、此の年の冬、会津若松に居る父長時を迎える為、平林弥太郎を使わした所、長時は大変な喜びであったが、陸奥の冬は厳しく老齢である為、来春に信州に至る事を約束して使を帰した。翌十一年三月、再び迎に行つた時には、長時は坂西彈右衛門の為に暗殺されており再び生きて府中に帰る事は出来なかつた。

貞慶は、木沢にあつた少林寺を正麟寺と改め、父長時を開基として、その菩提を葬つた。

貞慶の府中平定

小笠原貞慶は、府中深志の回復に当り成功したのは、

(1) 此の度の入府に当り事前に、旧臣や恩顧の者に対し、恩賞や所領安堵あるいは、宛行を約束して懐柔策を出した。その結果塩尻へ貞慶が来た時には、譜代旧臣の参集となつたのである。

(2) 貞慶を迎える下地として、小笠原貞種(父長時の舎弟)洞雪の重臣に対する府中武士の失望があげられる。貞種洞雪を迎えたのは「家筋」によつて府中の安定を求めたものであつたが、上杉から派遣された梶田・八代の二人は、洞雪に政治の事をまかせず、我尽な振舞が多く、小笠原譜代の与望を失う結果となつた。上杉勢の深志在城は旧臣達の思惑とは別のもので、好ましいものでは無くなつた。

(3) 小笠原家嫡流である貞慶の行方を付き止めた譜代が、積極的に還座を計つた。旧臣等の内二木一門・征矢野等の譜代が、起請文を書いて、三河の家康のもとで牢人していた貞慶に、還座の決意を促した。

此の様な事情で、府中を回復する事が出来た小笠原貞慶は、早速府中の統一平定に乗り出した。

日枝氏の攻略

日枝氏は仁科氏の一族で、犀川筋に川中島に通ずる要

路に当り、川挟城・中野山城・小池城・高松葉師城・小谷城・日枝大城・猿ヶ城・日枝城・白駒城等の山城や砦でがため、日枝盛直・弟盛武が居を構えていた。

天正十年八月初旬より、日枝氏征伐が初まる。先鋒として犬甘久知・塔ノ原城主海野三河守が派遣、同九日小笠原頼貞・赤沢・百束の諸将を援軍として松本を發し、安曇の穂高に陣を取つた。

会田方面には、赤沢式部大夫を青柳筋からの攻略を牽制させた。貞慶は日枝の降参を許さない厳しい態度で臨んでいる。

日枝氏の抵抗も相当なもので、容易には落ちなかつた三方口から攻める大がかりなものであつた。が草尾口から船で犀川を渡つた一隊により、日枝城は攻略され落城した。越後に退いた日枝盛武と穂高内膳盛棟は、後許されて貞慶に従つて各地に戦つて戦功を挙げてゐる。

然しながら、「違背之士悉殺之」と云う貞慶の冷酷非情な武断は続けられた。

会田氏の征伐

本能寺の変以後、松本以北は上杉景勝が侵入し、事如く其の勢力下に置かれていた。会田氏も「午の十一月会田ノ城ノ者共、越後へ内通仕、河中島依合力ヲ乞、矢久ノ入ニ小屋ヲ立居申候」と、会田村より数丁奥の矢久の地に砦を新設して、越後の応援で小笠原に対抗していたが、小笠原貞慶は、天正十年十一月三日から会田を攻め、日を経ずしてこれを落とした。

此の戦には、鉄砲が多数使用された事が知れる「鉄砲

ノ儀、明日急度指シ越スベク候」「鉄砲ノ玉薬、先ズ千放差越スベク候」「玉薬合せ次第、先ズ先ズ二百放指シ越シ候、出来候ハバ追々指シ越スベク候」と三日〱六日まで、日を追つて玉薬を送つてゐる様子が記されてゐる

註「この会田氏とは、鎌倉時代から会田御厨の地頭として入居した海野氏とは別である。海野氏の一系ではあるが小県郡岩下に分系した岩下氏であるが、同じく会田氏を名乗つてゐる。武田晴信の進攻の際、塔ノ原氏等と共に小笠原に叛いて、武田に降り武田治政下ではその軍役を勤めていたが、武田滅亡後は上杉に降り、松本に貞慶入府後も上杉に内通してゐた為、一早く貞慶から報復処置をされた。」

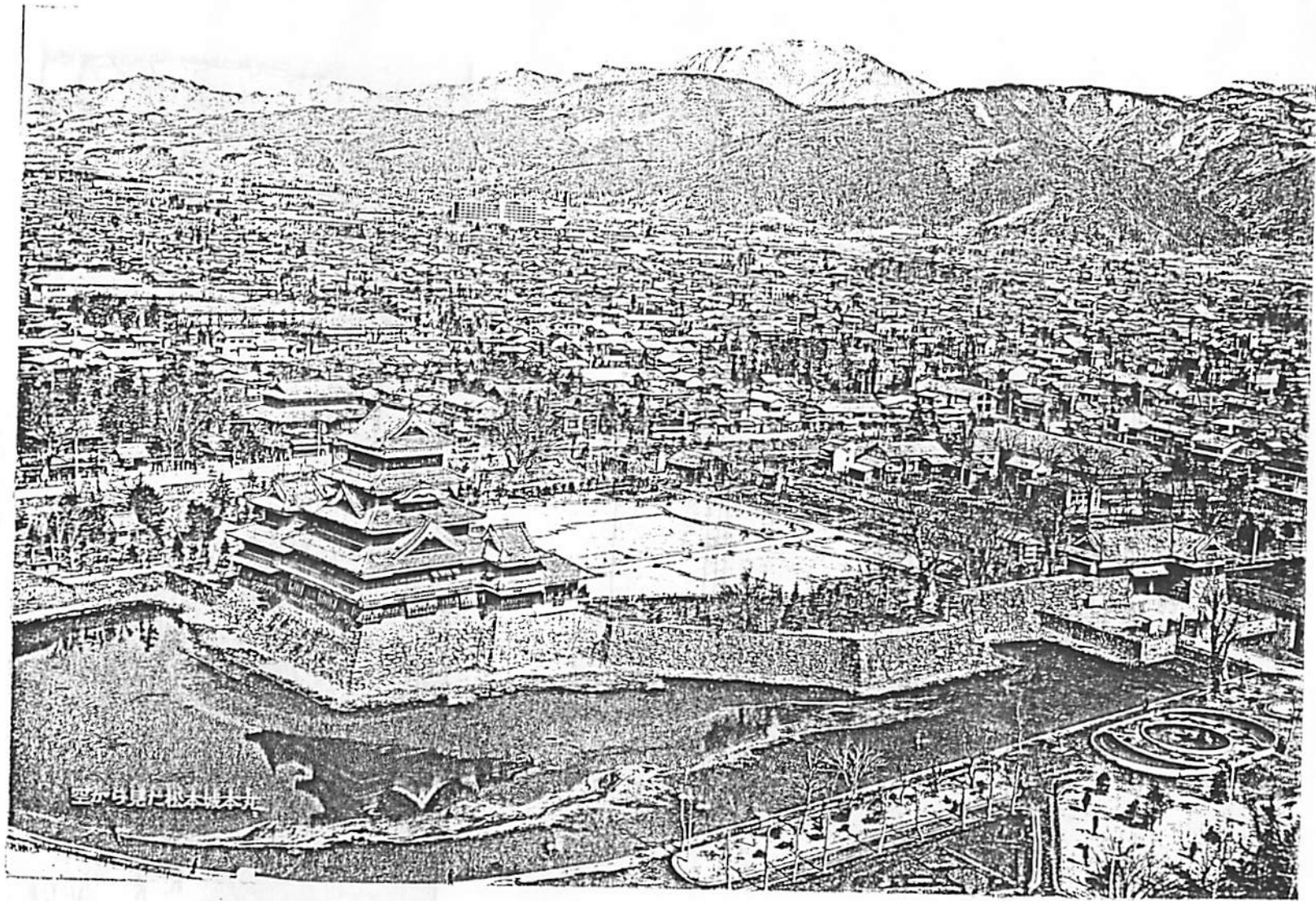
落城の時、会田小次郎広忠幼少の為、堀ノ内越前守などが旧来の会田城の地から数キロ、小県郡寄りの矢久に新城塞を築き、之を決戦場としたので、後世「一期の城」として伝えられたが、江戸時代の俗書に「覆盆子の城」と記されてゐるが言葉の転化である。

小次郎は決死の戦に敗れ、小県郡青木に逃れて五輪の尾根で自殺して果てたと伝えられてゐる。

この時、会田氏は亡び、寺も城も兵火に焼かれ亡んだがこの時住職は開基の位牌と過去帳を抱いて山中に難を避け、翌年寺の西北に会田塚を築いて、遺品を収め会田氏一類の亡霊を弔つた。今もしだれ桜の古木の下にこの塚が残り、自然石の石仏一基悲しく立つてゐる。

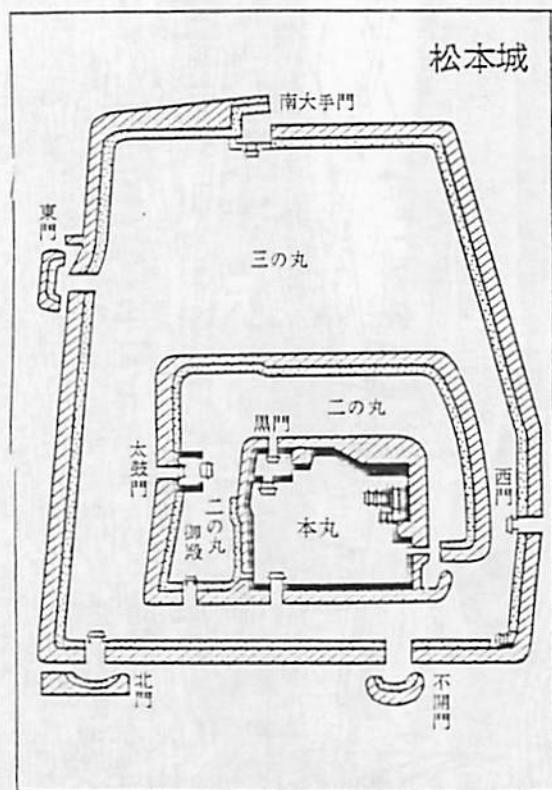
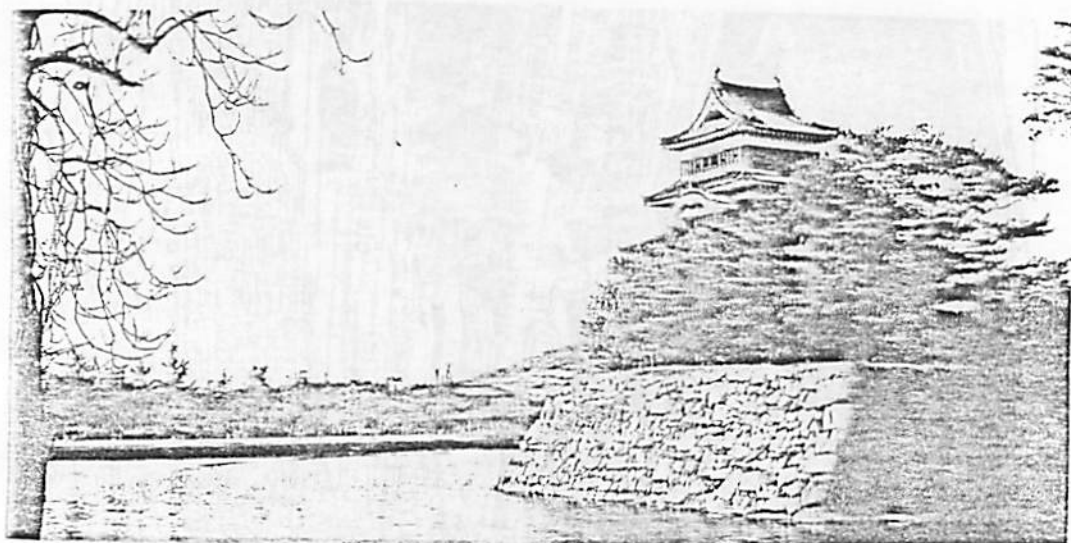
会田氏はここに全く亡び、この地方は小笠原氏の領有に帰した。

今筑摩郡に会田姓の者、一軒も残らずと云う。



松本城跡

▼松本城



私が会田氏に対し興味を持ち出したのは、郷土研究会発足当時からである。小学校の当時同級生の中に一會田一姓の者が何人もいた。先生の中にも又上下級生の中にも會田姓の者が沢山居て、間違える為に姓と名前を同時に呼ぶ事になつていた。年を取るに従い、會田姓の者達には一族意識の様なものがあり、許し合うみないな所があつた。こんな処が不思議でならなかつた。

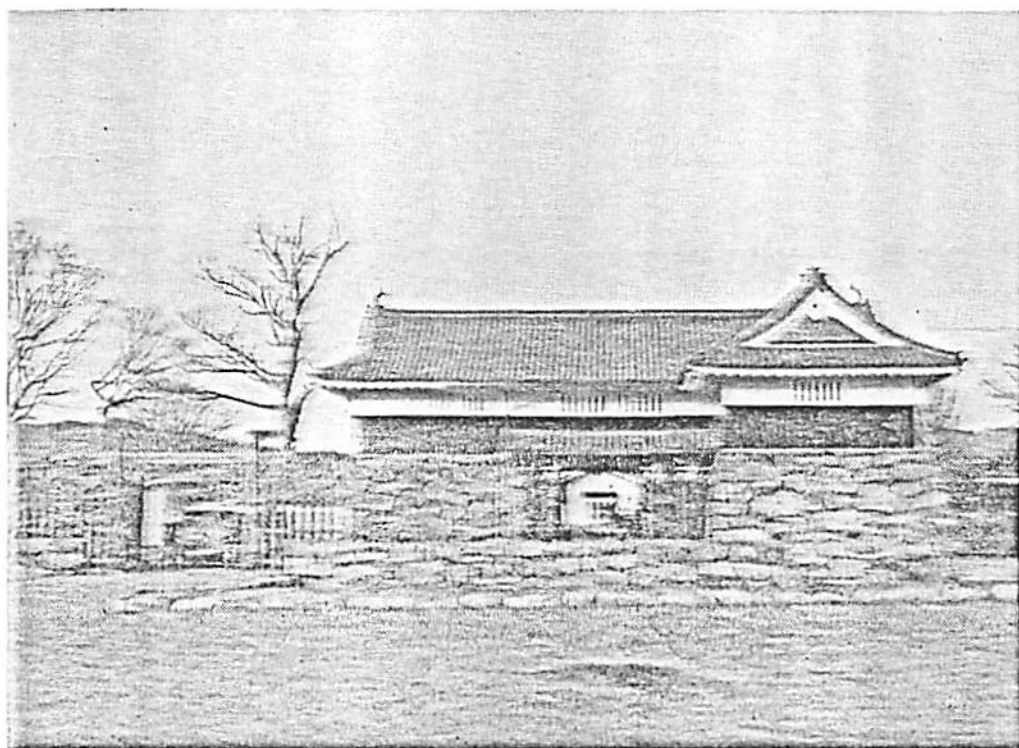
興味を持ち出してからも、この事は解決出来なかつたが、この度一越ヶ谷會田氏のルーツを探る一を執筆し出して始めてその理由を知る事が出来ました。

會田氏の先祖が、故郷を逃れて新天地を求め、一族の悲願である「お家再興」の思いが、四百年を経た今日迄連帯意識と共に、同族の繁栄を計る暗示を持つていた事が、今日電話帳に二百四十軒もの會田姓を見る程繁栄を見るに至つた理由である。

此の度の執筆に当り、静岡市在住の越ヶ谷會田出羽家の当主會田安之助氏より、家の宝である家系図のコピーを頂きました。長野県東筑摩郡四賀村會田にお住いの郷土史研究家、花村実氏より種々御教導並びに資料の提供を受けました。越ヶ谷會田氏草創の一家久右衛門家の当主會田圭氏より種々御協力頂きました。事等大変有難く紙上を以て厚く御礼申し上げます。

昭和六十年八月二十五日

山崎 善 司盛夏記



松本城大手門

参考資料

- | | |
|---------|----------|
| 東筑摩郡詩 | 郷土資料編算会 |
| 四賀村誌 | 四賀村誌編算会 |
| 小県郡史 | (株)明治文献 |
| 静岡会田家系図 | 会田安之助氏蔵 |
| 広田寺過去帳 | 広田寺蔵 |
| 海野真田系図 | 広田寺蔵 |
| 四賀村郷土資料 | 花村 実氏著 |
| 日本城郭全集 | (株)人物往來社 |
| 諏訪の歴史 | (株)郷土出版社 |
| 越谷市史 | 越谷市役所 |

連絡所 越谷市弥生町一―九
☎〇四八九一六二―三七三三

主催 越谷市郷土研究会
発会二十周年記念
第八十二回研究発表

題名 越谷会田氏のルーツを探る

発表者 当会員 山崎善司